

Yamanaka  
Tomotaka

山中與隆



Duo-Yamanka

コンサート  
は  
開かれた

コンサートは  
開かれた

---

山中與隆

## 目次

コンサートは開かれた

事故 1

大学生活 38

就職 57

出会い 79

|          |     |
|----------|-----|
| 合宿       | 133 |
| 訪問       | 153 |
| 別れ       | 182 |
| 風のアンスンブル | 247 |
| インテルメッツォ | 337 |
| 再会       | 361 |
| エピローグ    | 439 |
| 編者あとがき   | 463 |



コンサートは開かれた

## 事故

山中與隆

『ヨーシーターカ、ヨーシタカ』と節をつけて歌いながら四、五人の男の子たちが追い抜いて行った。いつものことなので気にもしなかつたし、むしろい

つまでも子供っぽいことを喜んでいるものだと、内心そのような男の子達をばかにしていた。

吉高義孝が生まれ育ったのは湯来と言う広島の間部の小さな町である。この変わった名前をつけたのは父親である。母親は反対したが、父親はこの思いつきを得意がってこだわったので、結局決まってしまうた。そのころすでに義孝の祖父母はこの世にいなかったが、この名前を知った人々は一様に変わ

った名前だと言った。それだけでなく、役場に出生届けを出すときにも、窓口の係員に、

「これでいいのですね」

と念を押されたと言う。義孝の父親は、このような周囲の反応を楽しんでいたようでもある。父親だけでなく両親とも、ある意味では世間体を気にするよりは自分たちの人生を楽しみたいと言うコンセプトを持った生き方をしていた。



一九四〇年生まれの義孝は一人っ子として両親にかわいがられ、順調に育った。一家三人は傍目にも仲のよい家族で、休日にはよく三人で山に出かけていた。自宅の目の前に聳える標高八百メートルの阿弥陀山には月に何度も登っていた。中学生になったころからは義孝一人でもよく登った。連休には家族で島根の三瓶山に出かけたり、鳥取の伯耆大山に行ったりもした。

彼らは山に登るのも好きだったが、山容を眺めるのも好きだった。同じ大山に行くのにも、米子から山容を正面に見ながら近づくだけでなく、東の倉吉の側からとか南の蒜山側からあるいは西の国道一八一号線からアプローチしたりするのだ。特に一八一号からのルートは、前方に大山が見え始める辺りが感動的だと言って、父親はこのルートを好んだ。

また大山より近い三瓶山は吉高家のお気に入り

山で、天気の良い休日にドライブしたくなると、三瓶に行こうと言うことになるのだった。三瓶山は千メートル級の山にしては雄大さよりも裾野を含めた山容全体が小ぢんまりとまとまっているところが気に入っていた。三瓶の場合もいろいろなアプローチが出来るが、国道三七五号線の途中から県道に入るコースが、大山の場合と同じように、突然特徴のある三瓶山の姿が前方にヌツと現れるので気に入って

いた。夏の初めには合歓の花が咲き乱れるのも魅力の一つであった。

義孝は中学校まで地元の学校に通った。学校の成績は良く、彼は広島市内の私立の高校に進んだ。彼の通った中学校からその高校に入ったのは、三年振りのことだった。近所の人たちから義孝は秀才と言われた。

通学にはバスで二時間かかった。冬はまだ暗いう

ちに家を出なくてはならなかった。広島市内よりも平均気温が三度は低いこの町では、雪もよく降った。凍結した道路をバスはチェーンを巻いて運行していた。それでも途中立ち往生した車などが無い限り、ほぼ時間通りに運行されていた。

義孝は高校でもよく勉強した。本質的に勉強が嫌いではなかったのだ。そして、テニス部に入って大会にも参加した。この高校のテニス部は広島では強

い方で、上級生は常に優勝争いに加わっていた。義孝も二年のときベストフォーに残ったこともある。男子校だったので、ガールフレンドの経験も無いまま義孝は高校生活を送っていた。

義孝にとって人生最大とも言える大事件が起きたのは高校二年の夏のことだった。義孝はテニス部の合宿に参加していた。この夏は山口県の角島での合

宿だった。日本海側の沖合い二、三キロのところにある島で、このような合宿などによく使われる施設がある。義孝たちは文字通りテニス漬けの日々を送っていた。

合宿真つ最中のある夕食のとき、義孝に電話の取次ぎがあつた。両親は義孝の合宿に合わせるように休暇をとつてドライブに出かけている。自分がここにいることは、両親以外は知らないはずである。い

つたいこんなところまで何の用だろうと訝りながら義孝は事務室に急いだ。

電話は、叔父からだった。父の弟が名古屋で小さな会社を経営していることは、もちろん知っていたが、ふだんはほとんど行き来が無く、義孝は小学生のころ祖父母の法事に叔父夫婦が湯来の家に来たときに出会ったくらいしか記憶が無かった。だから義孝は驚いた。電話の向こうの叔父の声は緊張していた。



「義孝君。お父さんとお母さんが大きな交通事故に遭ったらしい。警察から連絡があつた。私はこれからすぐ現地に行くが、義孝君はとりあえず家に帰つて連絡を待つてくれないか」

たしか両親は信州方面に行くと言つていた。

「信州ですか？」

「そうだ。それで義孝君はすぐに家に帰ることはできるの？」

「明日一番で帰ります。あ、ちよつと待つてくださ  
い」

義孝は電話をそのままにして、誰かと話している。  
そして、

「まだ帰る便があるそうなので、これから帰ります。  
今晚遅く家に着けると思います」  
と返事した。合宿所の職員が、この時間にはまだ連  
絡船があるから、広島なら充分帰れることを教えて

くれたのだ。

「そうしてくれ。詳しいことは私が現地に行つてから知らせる」

直ぐ家に帰つて待機するようにと言うことは、大変な事故だったことを意味していると義孝は思った。どうして警察は叔父に連絡したのだろうか。それに、叔父は自分が角島で合宿中であることをどうして知つたのだろうか。このときの電話で叔父は、そのよ

うなことについては何も説明しなかった。

義孝は、テニス部の顧問に事情を話し、すぐに荷物をまとめて合宿所の職員の車で、小さなフェリーで対岸に渡り山陰本線の特牛駅まで送ってもらった。職員が調べてくれていた列車は直ぐに来た。二両編成のディーゼルカーだった。ガラガラに空いた車内に義孝はポツンと一人座って、残照の日本海を見ながら、両親の事故のことを考えた。

自分が小学生のころは、一家三人でドライブによく出かけたが、中学、高校になってからはクラブ活動が忙しくなった義孝を置いて、両親は夫婦二人で出かけることが多くなった。

信州で事故に遭ったことを叔父が連絡してきたのは、信州に入る前に両親は名古屋の叔父を訪ねたのかも知れない。そうだとしても、警察は名古屋に叔父がいることなど知るはずもないから、きつと父が

叔父への連絡を頼んだのだろう。それにしても、父か母が自分で連絡しないのは、二人ともよほど大きなケガをしているのだろうか。そうでもなければ、わざわざ叔父に連絡したりしない。少々のことなら自分達で処理するはずだ。叔父は大きな事故らしいと言っていた。義孝はさまざまに想像をめぐらした。両親のどちらかが死んだと言うことも考えられる。しかし、親の死などと言うことは、この時の義孝に

は現実味を持って想像することはできなかつた。

下関で山陽本線に乗り換えた。窓の外はもう真つ暗で、窓には車内と自分の顔が映っている。その背景のように街灯が一定の間隔で後ろに飛び去っていく。岩国で乗り継いで五日市駅まで行った。そこからは、もう最終のバスは出た後だったのでタクシードで湯来まで帰った。タクシー代などは顧問の先生が、「お前のところは田舎だからこれからだと、もうタ

クシーしかないだろう」

と言つて、貸してくれていた。夕食も食べかけのままで、心配そうな部員たちの表情に送られての帰宅だった。

義孝は、家に着くとすぐに角島の合宿所に電話して、顧問に家に無事着いたことを報告した。それから名古屋の叔父の家に、電話したが誰も出なかつた。夫婦で現場に向かつたのだらうか。



叔父からの電話があつたのは、深夜の二時頃だつた。

「ああ、帰っていたんだね。私たちは、少し前に現地に着いた。落ち着いて聞いてくれ」

叔父は電話の向こうでしばらく逡巡していたが、

「お父さんもお母さんも駄目だった。和田峠と言うところで事故に遭つたらしい。警察の人の話では、大型トラックと正面衝突したと言うことだ。原因な

どはまだわかっていないらしい。私たちはいまお父さんたちの遺体の搬送先の病院にいる。これからどうするかは、この人たちと相談してからになる。

義孝君はそこにいて、次の連絡を待ってくれ」  
すぐに叔母が代わった。

「義孝さん、大変なことになったわね。大丈夫？ 気をしつかり持ってね」

叔母は泣き声であった。義孝自身は、自分でも驚く

ほど冷静であつた。合宿の角島から帰つて来る間の数時間にあれこれ想像しつくしたからである。二人とも死んでしまつたと言うことは想像していなかつたが、いま叔父に言われた瞬間、当然ありうることだつたことに気づいたのだつた。義孝は子供のころから自分のことを、何があつてもいつも冷静に對処できる人間だと感じていた。このとき義孝は動転してわれを失うということとはなかつたが、体中から

血の気が引くような悪寒を覚えた。義孝がこれまでの人生で遭遇した、まぎれもなく最大の出来事である。この瞬間両親ともこの世からいなくなっている。と言うことが現実として受け入れられなかった。

義孝は電話を切ったあと長い時間呆然としていたが、ふと思いついて地図を持ち出して和田峠の場所を調べた。それは諏訪湖から北上する国道一四二号線の途中にあつた。地図には、その北の方に浅間山

があり、その手前に小諸の字が見える。義孝は、母親がよく口にしていた小諸に向かつていたのかも知れないと思った。母は島崎藤村の『小諸なる古城のほとり、雲白く遊子悲しむ、緑なすはこべは萌えず・・・』という詩が好きで暗誦していたことを思い出した。特に『小諸なる古城のほとり』と言う最初の一節を、胸が痛くなるほど良い響きだと言っていた。

そうだ、両親はきつと小諸に向かっていたのだ。

憧れの小諸を目前にして二人とも他界してしまった。義孝の頬を静かに涙が流れた。車に乗った両親の目の前に巨大なトラックが襲い掛かってくる情景が想像されて身体が震えた。

朝の六時ころ叔父から電話があつた。今日遺体搬送用の車で、両親の遺体を湯来まで運ぶことにしたと伝えてきた。この連絡を聞いてから義孝は、両親

の死が現実のこととして理解され始めた。受話器を置いた義孝を、初めて慟哭が襲った。両親の遺体が来るまでに何をしたらいいのかわからなかった。しばらくぼんやりしていたが、この集落では誰かが死ぬと、直ぐに町内会長に知らせて、町内の仕来りに従って葬式をしていることを思い出した。義孝はいま町内会長が誰なのかもわからなかったの、向かいの家に行つてことの次第を話した。それで直ぐに

町内に連絡が回つて、向かいの主人、町内会長、月当番の人たちが義孝の家に来て来た。彼らは通夜や葬儀のことを打ち合わせに来たわけだが、まだ遺体も着いていない上に、事情のわからない義孝一人なので、遺体と叔父達が着いてからあらためて相談することになった。これらのことをしたことで、義孝はこの家のことを決めるのは、これからは自分しかいないことを思い知った。



その日の夜遅くなつて、叔父夫婦に付き添われた  
両親の遺体が湯来の家に着いた。翌日早くから叔父  
が中心になつて父の勤務先への連絡や、近所の人た  
ちとの打ち合わせがなされた。町内の仕来たりに従  
つて通夜と告別式が行われた。葬儀には事故を起こ  
した運送会社の社長と言う人がひっそりと参列して  
いた。その実直そうな初老の男性が、義孝の前に正  
座して深々と頭を下げた。このとき義孝には、この

人の会社のトラックが両親を死なせたのだと言う憎しみとか怒りとかの感情は湧いてこなかった。今回の事故の状況全体がまだ義孝の中で整理が付いていなかったのだ。両親が納められた二つの棺が目の前にあったが、何かよその世界の出来事の中に自分がいるような気持ちだった。棺が閉められる前に蓋が開けられ、参列者達が棺の中に花を入れた。義孝は堅く目と口を閉ざした青黒い両親の顔を目にして、

全身に悪寒が走った。渡された掬の花を両手に持つて母親と父親の顔の周りに置いた。義孝は自分の両親ではないような感じがしていた。両親ならもつと自分の近くにいるはずだと思った。棺の中の母と父は、遠い別世界の存在のように感じられた。

葬儀がすんでから叔父夫婦は、義孝に名古屋の自分のところに来るよう勧めたが、義孝は少なくとも

高校卒業まではここで生活すると言つて辞退した。

叔父夫婦は一週間湯来にとどまつて、いろいろな手続きなどもすませてくれた。そして湯来にいらっしゃるに初七日もすませた。

葬儀から一週間は、叔父夫婦と三人の生活だったが、やがて義孝一人になるときが来た。白い布に包まれた二つの骨箱と、義孝だけが広い家に残された。叔父夫婦が名古屋に帰って行った日の午後、義孝は

夕方暗くなっても明かりも点けずに座り込んでいた。そこに向かいの家の奥さんが、盆に夕食を乗せて持ってきてくれた。奥さんは、

「食べるものは、何だかんだあると思うけど、作つたばっかりのものだから、しつかり食べて・・・」  
と言つて、置いていった。奥さんは涙声で鼻をすすりながら帰つていった。義孝は、食事を持ってきてくれたことで少し心の中にぬくもりを感じるこゝろが

出来た。食事から立ち上るほのかな香りで、義孝はひどく空腹であることを思い出した。考えてみると、葬儀の後出前を取ったり、叔母が食事を作ってくれたりしたが、義孝はずっと、食欲がないと言つてほとんど食べていかなかった。いま差し入れられた食事の味噌汁はまだ熱かった。義孝は何日かぶりに食欲が出て、一気に食べた。現実世界の自分に戻つたような気がした。義孝は食器を丁寧に洗つて、向かい

に返しに行つた。奥の方からテレビの音がしている。何かバラエティ番組でもやっているのだろう、テレビの中の笑い声が聞える。奥さんが出てきて、いつでもよかつたのと言いながら盆を受け取つた。そして、

「何か困つたことがあつたら、何でもいいから遠慮しないで言いなさいよ」  
と優しく言つてくれた。奥から主人も出てきて、

「これからは、わしらを家族だと思つて、遠慮したら駄目だぞ」と言い足した。

事故後のことについては、名古屋が現場に近いこともあつて、すべて叔父が対応した。事故の原因は、トラックが中央線を越えて両親の車にぶつかつて来たと言ふことであつた。父たちの直ぐ後ろを走つて



いた車は、ブレーキをかけてかろうじて難を逃れた  
そうだ。それにはトラックの後ろを走っていた車の  
運転者たちの証言もあつたようだ。そのためトラッ  
クが所属する運送会社が、事故に遭つた者への全面  
的な補償を認めたと言うことであつた。

義孝は十日後に学校に復歸したが、テニス部は辞  
めた。テニス合宿の最中に両親の事故を知つたこと  
で、テニスと事故がトラウマのように義孝の頭から

離れなくなつたからであつた。

これまですべて母親に頼つていた生活を、自分ひとりでこなしながら高校生活を続けるのは大変だつたが、それには徐々に慣れていった。金銭的には、父親の生命保険、事故の補償金、父の死亡退職金それに貯金などで、義孝が大学を出るくらいまでの生活にはままったく困らない状態であつた。

## 大学生活

義孝が大学進学を考えていたとき、叔父は名古屋の大学に進むように言ってきたが、湯来の家での一人暮らしに慣れてきていた義孝は、広島に大学に進むことにした。義孝は難なく工学部の入試を突破した。子供のころから何となく、将来は造船にたずさわりたいと考えていたので船舶工学科を受験したの

だった。

しかし、義孝は大学に入ると、授業よりもサークル活動に熱を上げるようになった。義孝が入ったのは理屈っぽい音楽芸術研究会というサークルであった。来る日も来る日も狭い部室に集まっては音楽論をたたかわせると言う、何ともオタクっぽいサークルである。論文と称して音楽に関する作文を書いては、部員が互いに批判しあつた。

両親ともクラシック音楽好きで、義孝の家には、レコード棚が壁の一面を埋めていた。義孝は小さいときから親が聞く音楽を聞きながら育ったので、このようなサークル活動をするようになったのは当然の成り行きであつた。サークルで議論のために聞く資料としての音源は、ほとんど何でも両親のコレクションの中にあつた。

エネルギーと暇をもてあます大学生生活で、義孝た

ちは飽きもせず、この討論ごっこを楽しんだのだつた。学業が忙しいはずの大学生が暇をもてあそぶと、いうのは、とかくの批判があつたが、義孝たちはそういう言つた批判に当てはまるような学生生活を送つたのであつた。最も優れたバイオリン協奏曲は何かとか、世界で一番美しいメロディは何かと、言うことがテーマになるなど、単なる音楽好きのおしゃべりのようなことをまじめな顔をして論じたりもしていた。

のである。ちなみにメロデイについて義孝はチャイコフスキーのピアノ協奏曲第三楽章の第二主題を世界で最も美しいと思っていた。ヴォルフ||フェラーリの「聖母の宝石」を挙げるものや、リムスキー||コルサコフの「シエヘラザード」のバイオリンのメロデイを持ち出す者もいた。誰もが若く、ロマンテイトであった。

このサークルに門田映湖というピアノが上手いと

言う噂の後輩の女性が入ってきた。義孝は彼女のピアノを聞いたことはなかったが、彼女とピアノはセツトのように義孝にインプットされていた。高校時代の彼女を知る人の話では、門田映湖は校内の何かの会でリストの「ラ・カンパネラ」を見事に弾いたと言うことだ。それだけでなく彼女は暇さえあれば音楽室でピアノを弾いていたとも言っても聞いた。彼女は自分の家にピアノがなかったらしい。門田映



湖は色白でやや小柄だったが、いつも知的で静かな笑顔を湛えていた。義孝の心に門田映湖のことが占める割合が大きくなっていた。

彼女もサークルの討論会には欠かさず参加していたが、いつも同学年の仲良しの女子学生と一緒にいたし、学年も違うので、義孝は遠くから彼女を、憧れを持って眺めるだけであつた。地味なタイプの彼女は、ほかの男子学生から誘われるようなこともな

いように見えた。それでも、彼女の存在は、義孝の心を豊かにするのだった。ただそれだけのことであり、門田映湖は二年の途中で何故か、音楽研究会を辞めていった。サークルを辞めても在学はしていたと思われるが、それ以来義孝が彼女を見かけることも、消息を聞くこともなくなつた。しかし、その後も永く義孝の心には彼女のイメージが在り続けた。それは母親のイメージが永久にあり続けるのにも似

ていた。

門田映湖がいなくなっても、義孝たちの音楽論はエスカレートしていった。音楽について書かれた本の読書会も盛んに行ない、本格的な音楽論も大いにたたかわせた。ハンスリツクの「音楽美論」、ワーグナーの「指揮について」、ソ連共産党の「ジュダーノフ批判」、フルトヴェングラーの「音と言葉」、ガイリンガーの「ブラームス 生涯と作品」、フランス語

が読めるドイツ語専攻の部員が紹介した、ロスタンの「ブラームスの生涯」も、その部員自身がこの長大な伝記を部分的に訳して資料に供した。ロスタンはこれまでのブラームス伝と違う視点を持っていて、その新鮮さが議論に向いていた。

ブラームスがよく取り上げられたのは、義孝のブラームス好みに由来するところが大きい。また吉田秀和の著書の数々は、常に重要な議論の題材となつ

た。またあるときはレコードジャケットの解説の記述さえも議論の的になつた。要するに彼らは

「音楽は何故かくも魅力的なのか」

と言うことを飽きることなく話し合いたかつたのだ。しかしそのような討論に確たる結論が得られるわけもなく、ただひたすら自分たちの好きな音楽を聞きかつ語り合つた。

こうした活動の中で義孝がもつとも関心を持った

のは、精気に溢れた感動的な演奏と、そうでない演奏との違いは何処にあるのかということだった。一見ミスなく立派に演奏された専門家たちの演奏でも、聞くものの心を掴み大きな感銘を与える演奏と、退屈してしまふような演奏がある。そのような演奏の何がその違いを生むのかが義孝の追い求めたテーマである。

演奏技術の優劣、解釈の違いあるいは曲の理解度、

演奏者がその音楽を本当に素晴らしいと思つて演奏しているかどうか、聴衆にその音楽の素晴らしさを届けようとしているかどうか、ホールや録音の良し悪し、良い楽器を使っているかどうか等々義孝たちは考えられるあらゆる角度から議論した。同じ曲の、感動的だと感じた演奏とそうでないと感じた演奏とを選び出して、その曲のある部分を取り出して、テンポあるいはテンポの変化、間の取り方、抑揚のつ

け方やその振幅の大きさ、強調する声部などを、指紋の照合のように比べてみたりもした。そのうちに、ある人には感動的でも、別の人にとってはそれほどでもないという、聞く側の問題も無視できないことがわかってくる。聞く人間の感受性、理解力、集中力、聞く時の状況などである。このような活動のため、みんなは議論の対象になる曲のミニスコアを持つことを求められた。そのためみんなは小遣いを



はたいて、何冊ものスコアを買い揃えた。中でも義孝は、ベートーヴェンの「運命」が討論のテーマになると、ベートーヴェンの交響曲九曲全部のミニスコアを買って、みんなで討論する前に、個人的に比較検討すると言う熱心さであつた。

それがこうじてついに音楽芸術研究会は、自らも表現を実践しなくてはならないと宣言して、オーケストラは上げすぎるのでまずは弦楽合奏団を立ち

上げることになった。楽器経験のまったく無い者たち  
が、楽器集め、弦楽器の経験者探し、そして自ら  
初めての楽器の手習いとそれまでの高邁な議論とは  
かけ離れた現場的作業に没頭し始めた。それも演奏  
という点で子供の手習いにも及ばないような初歩的  
な段階から始めたのだ。それでも時間と労力の無駄  
とせず、音楽の表現について検証できると考えて  
くそ真面目に実行し始めるところが、もののよくわ

かつた大人には考えられないところで、その無謀さこそが若者の特権なのである。

幸いに教育学部音楽科のバイオリン専攻生三人が関心を示して参加したことで、不十分ながら形を成し始めた。付属高校の音楽の先生がチェロを一台貸してくれたことも大いに力になった。

義孝自身はそのときにチェロを始めた。楽器は自分で買った。義孝は、街中を歩き回ってある古道具

屋の店先にぶら下がっていた鈴木製のチェロと弓と布製のケースを、家庭教師のアルバイトでためた金をはたいて手に入れた。生活費や学費に当てていた親の遺産をこういうことに使わないようにしたのだつた。

生まれて初めて手にするチェロを、バイオリン専攻の女性が手ほどきしてくれた。義孝だけでなく合奏団の、音楽芸術研究会にいたメンバーのほとんど

は似たり寄つたりの素人だ。机について口角泡を飛ばしていた面々が、バイオリン専攻の美しい三人の女性の指導で、幼稚園の生徒さながらに合奏練習を始めたのだ。それでも一年後には第一回発表会と称して、オーデイオ店のショールームの小さな舞台上で、バッハなどを含むプログラムの小さな演奏会を開くまでになっていた。

## 就職

大学を卒業するまで義孝は、自炊をしながらの一人暮らしを通した。大学を出ると、叔父が名古屋で経営している建設資材の会社に就職した。大学入学の動機であつた造船とは関係ない就職であつたが、そのころ義孝は卒業に必要な単位だけは何とかとつたものの、船への関心はどこかに消えていた。叔父

の、名古屋に來ないかと言う再三の勧めにやつと従つたのだつた。

義孝が名古屋に來て最初にしたことは、和田峠に行くことだつた。それは、両親の事故以來ずっと胸に秘めていたことだつた。叔父夫婦も同行してくれだ。三連休を使つてのドライブとなつた。小諸市内に一泊したあと和田峠で両親を偲び、白樺湖にもう

一泊して帰る小旅行であつた。決して楽しい旅と言  
うものではなかつたが、三日間快晴に恵まれてドラ  
イブそのものは快適であつた。そのとき義孝はまだ  
免許も車も持っていなかつたので、叔父の車、叔父  
の運転であつた。

小諸の宿で、叔父は義孝に事故の様子を詳しく話  
した。またトラックの運転手が事故後なんども叔父  
を訪ねて来たことも話した。それらは義孝が初めて



聞く話だった。運転手は事故の責任を取る形で運送会社を退職していた。運転手は義孝に心から詫びたと言ったそうだが、叔父は自分が伝えるからわざわざ広島まで行かなくてもいいと断ったそうだ。叔父は運転手がいくら誠心誠意詫びても、義孝の親が戻ってくるわけではないし、両親の命を奪った運転手を目の前にして、かえって義孝の心に運転手に対する憎しみが増幅しないとも限らないと考えたから

であつた。叔父にしてみれば、厳しい労働条件の中で過労からか一瞬の居眠りによつて起きた事故を百パーセント憎みきれなかつたのである。会社は十分に遺族に謝罪し補償金も支払つたのだから、これからは運転手自身とその家族の将来を考えて生きるように促したのだつた。義孝は両親の葬儀に運送会社の社長が来ていたことを思い出した。

小諸の宿を出て事故のあつた和田峠に行く前に、

義孝の希望で小諸城址に寄った。島崎藤村の詩碑の前で

「小諸なる古城のほとり」  
の文字を目にして、義孝は胸を詰まらせた。叔父たちは、詩碑の前で弱々しく佇む義孝をやや離れたところ、いつまでもそうさせていた。

事故から何年も経った和田峠に事故の痕跡はもろんなかったが、叔父が教えた場所で三人は無言で

手を合わせた。義孝はここでも胸がいっばいになったが、叔母は涙をこらえずに泣いていた。

白樺湖畔のホテルでも、もっぱら両親の話ばかりで、三人のなんとも涙っぽい旅行であった。白樺湖では、小諸で出なかつたことも叔父は話した。

義孝は事故以来聞きたいと思ひながら、聞き忘れていたことを思い出した。あるとき警察はどうして叔父に連絡を取つたのか。と言うより、どうして警

察に叔父の連絡先がわかったのか。そして叔父はどうして、義孝が角島で合宿中であることを知っていたのか。

「それはね、君のお父さんたちは信州に向かう前に、私たちのところに一泊したのだよ。そのとき君が山口県の角島と言うところで合宿中だと話していたからね。それから警察はお父さんの免許証の住所から、湯来に電話したが誰も出なかったのので、免許証に挟

んであつた私のところの電話番号を書いたメモがあり、そこに同じ吉高と言う名前があつたので電話したら、私が出たと言うわけさ。お父さんが、何かあつたときのためにそんなメモを免許証に入れていたのかも知れないね」

聞いてみれば、特に不思議なことでもなかつた。二人でよくドライブに出かける両親の普段からの心がけだつたのだらう。叔父は、広島と名古屋と遠く

離れて暮らしているが、こういうときに頼れる唯一の身内だったのだ。叔父は言葉を継いで、義孝がまったく知らなかったことをさらに話した。

「義孝君は、両親ともからだの調子が良くなかったのを知っていた？」

「いやまったく。ただ母はひどく物忘れが激しいことは、年のせいだと言つて嘆いていました」

「それがただ年のせいではなくて、若年性アルツハ

イマーと診断されていたそうなんだ。進行を遅らせることは出来ても、治すことは出来ないと言われていたらしい。それだけでなく、お父さんは肝臓ガンだったの知っていた？」

「いや」

「私は半年くらい前にお父さんから手紙をもらって知っていたのだがね。「私は治らないらしいから特別の治療はしない。このガンは放っておいても死ぬま



で痛くはならないらしい。ただ私が死んだあとはお母さんと義孝を頼む」と書いてあった。そして、このたび私の家に寄ったとき、このドライブはおそらく最後の旅行になるだろうとも言っていた。そのことと事故とは関係ないのだけど、例のトラックの運転手が、確かに自分は一瞬の居眠りで相手車線にはみ出したのだが、直ぐに気が付いてブレーキをかけたので、衝突の時にはほとんど止まっていたと思う

と言っているのだよ。そのときお父さんの車はかなり前方に居て、急ブレーキをかければ止まれる距離だったように思うともね。それなのにお父さんの車はまるでスピードを上げるようにしてぶつかってきただと言ってるんだよね。運転手は、だからと言って責任を逃れるようなことは一言も言わずに、全面的に自分が悪かったと言っていたけどね」

「だったら、叔父さんは父がわざとぶつかっていつ

たと思うのですか」

「そうは言わないけど、ただトラックの運転手の言うことが本当だったら、一方的にあちらを責めるわけにも行かないような気がしてね。ただ、警察の調書も、トラックがはみ出して、反対車線の乗用車と正面衝突したことになるので、私もそれを覆そうとは思わなかったんだ」

義孝は、叔父がトラックの運転手を憎むようなこ

とをしなかつた理由がわかる気がするのだつた。そう言えば、父たちの直ぐ後ろを走っていた車はちやんと止まっていたと言うのも、叔父の言うことを裏付けているかも知れないと義孝は思った。

叔父の会社で義孝は営業から始めることになった。叔父・甥の関係だからと言って特別の待遇があるわけでもなく、義孝は他の同僚社員たちと同じように

働いた。

会社は、土木建築の資材を扱っている商社で、小さな建材店や工事現場に材料を届けたりすることが主な仕事だった。叔父には二人の息子がいた。義孝の父よりも結婚が早かったので、二人の従兄弟は義孝よりも年上だった。彼らは二人ともこの会社に入っていて、それぞれ若いのに重要なポジションの責任者になっていた。義孝は二人の従兄弟の配下で働

くことになつたのだつた。

義孝は特別に営業成績を上げるわけでもなく、かといつて駄目社員と言うわけでもなかつた。自社の商品の知識を身につけたり、顧客との関係をつくつたりなどであつたという間に月日が過ぎていった。初めのうちは学生時代の自由勝手さが染み付いていて、朝早くからの出勤が辛かつたし、大学のよゝな夏休みも冬休みも無い生活も窮屈だつた。しかし授業の

退屈さに比べると、退屈する暇も無い生活はある意味で張りがあつた。また試験がないことも、学業に本腰を入れなくなつていた義孝にはありがたかつた。

義孝はチェロを続けるつもりで、名古屋のワンルームマンションの狭い部屋にチェロを持ち込んでいた。しかし、義孝が仕事から帰宅するのはたいてい夜で、他の部屋の迷惑になるのでそこで音を出すことは出来なかつた。義孝は、休日に会社の事務所で

練習する許可を叔父に取り付けた。叔父、甥の関係がメリットとなったことのひとつであつた。また義孝は、父親のコレクションの中から、かなりのレコードを選び出して持ってきていた。生活の道具は僅かなのに、レコードと本ばかりが下宿の狭いスペースを占領していた。仕事から帰ると、夕食を自炊し、ヘッドホーンでレコードを聞き、本を読むのが義孝の生活だつた。



三年が過ぎて多少仕事に慣れてくると義孝は、毎日同じ得意先の注文を受け、商品を届ける仕事にマンネリを感じ始めた。義孝のそのような様子を察したのか叔父は、義孝に建材店回りではなく、もっと変化のある工事現場に出かける仕事を勧めたが、義孝はそれまでの建材店回りをさせて欲しいと頼んだ。会社は基本的に土日が休みだったが、担当する部門によっては休日出勤が多くなるケースもあった。

特に工事現場は出張が多く、土日にかかることもよくあるのを同僚たちの勤務状態を見て知っていた。休日には仕事をすれば適当な平日に代休を取ることもしてきたが、そうすると誰もいない土日に事務所でチエロを弾くことができなくなる。その点幸いに義孝の建材店回りは、土日にはほとんど休めた。たまに得意先のゴルフなどに誘われることもあったが、ゴルフをまったくくしない義孝は、いつも会社からの酒

などを届けてゴルフの方は丁重に辞退していた。叔父からは、営業上必要だから、道具は自分が使っているものをやるからゴルフを覚えたらどうかと言われたことがあつたが、義孝にその意思がないことを知ると、叔父はそれ以上勧めることはなかつた。大切な客先からの誘いには叔父自らが行ってくれるのだった。

## 出会い

そのころ、たまたまチラシを見て聞きに行つたアマチュアの弦楽合奏団の演奏会で貰つたプログラムに『団員募集、特にチェロとヴィオラ。練習日は日曜日の午後』とあるのを目にした。義孝はプログラムにあつた連絡先に電話してみた。電話には合奏団の責任者であると言う、年配の男性の声が答えて、

チエロの経験者なら大歓迎だと言うことだった。義孝はその場で入団の意思を伝え、練習場所と練習日時を聞いた。

合奏団の練習は日曜日ということだったので、義孝は建材店回り続けることを希望してよかったと思つた。

義孝は最初の練習日、緊張して席についていた。練習が始まる前の指慣らしさえもみんなの耳目に曝

されるような気がして、小さな音しか出さなかつた。責任者の男性は、六十を越していると見えるが気が強そうな顔をしていた。彼が義孝をみんなに紹介した。

この日最初の練習曲はレスピーギの「リュートのための古代舞曲とアリア第三組曲」だった。幸いに大学時代にやったことがある。最初のピッツィカートのフレーズをなんとかついていくことが出来て、

義孝の緊張は少しほぐれた。

第一楽章が終わったとき、チエロのトップが義孝に言葉をかけた。トップと言つても、そのときチエロはその人一人しかいなかった。もう一人いた女性が最近夫の転勤とかで退団したばかりだったのだ。トップにしてみれば新入りがどの程度の技量か気になつていたのである。

「なかなかいいじゃないですか。初見なんですよ？」

「初見じゃないですが、久しぶりです」

「いやいや、それにしてもたいしたものですよ」

トップは、これなら戦力になると思ったのかも知れない。もちろん義孝がトップ以上にほっとしたことは言うまでもない。

そうは言っても曲が進むにしたがって義孝は弾けないところもたくさんあって、休憩に入っても出来なかつたところを見直したりして、談笑している団



員たちの輪に入っついていかなかった。みんなは練習場の隅の机に用意されたポットからコーヒーを注いで飲んだり、駄菓子をつまんだりしながら立ち話をしている。誰も音を出さないので義孝もさらうのをやめた。そこに、コーヒートとチョコレートを持って一人の女性が近づいてきた。優しい笑顔と生き生きとした表情の女性で、ここに来てすぐに義孝が印象付けられた女性だった。

「竹田と言います。どうぞよろしく。これどうぞ」  
そう言いながらコーヒーを義孝に渡し、カラフルな  
銀紙に包まれたチョコレートを三つ義孝の譜面台の  
楽譜置きに並べた。彼女は戻っていったがすぐに自  
分のコーヒーを持って来ると、義孝の隣の空いた椅  
子に座った。見ると、彼女が持っているコーヒーカ  
ップに竹田と書いてある。それに気がついた義孝は、  
彼女に聞いた。

「みなさん自分のコップを持って来られてるのですね」

「吉高さんも次のときにそうしたらいいですよ。それともコップはいくらでもあるから、あの中のどれか気に入ったのに御自分の名前を書いてもいいんですよ」

と隅の机の方を指差しながら説明した。そしてあらためて義孝の方に向き直って、

「チェロ、いい音ですね」と言つた。

義孝は学生時代には古道具屋で買ったチェロを使い続け、就職したとき名古屋に持って来たのもそのチェロだったが、二年目の冬のボーナスで新しい楽器にしたのだった。

名古屋の弦楽器専門店で長い時間試奏して選んでから買ったものだ。ろくに弾けもしないのにあれこ

れいろいろなチェロを試奏した。義孝は少し気後れしたが必死でその気後れと闘いながら、大汗をかきながら試奏を続けた。いろいろ試奏すると言つても、専門家であれば有名な曲の一節を鮮やかに弾いたりするのだろうか、義孝にそんなまねは出来ない。楽譜も無しで、その場で弾ける曲などない。音階をゆつくり弾いて、楽器の音色や弾きやすさなどを試した。そのとき義孝の考えていた予算は百万円だった

が、それは店の人には言わず、展示してある中で一番高い四百何万円と値札の付いた楽器も、気に入らたら買えるんだと言う顔をして触らせてもらった。結局楽器店の主人の意見も聞いて、百五十万円の楽器と三十万円の弓、それに十万円のハードケースを買うことになった。予算の倍近い買い物になったが、足りない部分はローンでいいと言うので、思い切ったのだった。

その楽器のことを、いま竹田という美しい女性に「いい音だ」と言われて、義孝は嬉しかった。彼女はやや小柄だが均整が取れている。健康そうな顔色で、義孝にはほとんど化粧をしていないように思えた。ふつくらとした頬が魅力的だった。

休憩後の練習は、ヘンデルの合奏協奏曲第六番だった。運良くこれも学生時代にやったことがある曲だった。バイオリンのソロはコンサートマスターと

竹田の二人で、チェロのソロはもちろんトップである。竹田はセカンドのソロだったが、よく通る伸びやかな音で弾いていた。義孝は練習の間中竹田の音ばかりに注意を集中していた。音色だけでなくメロディの歌わせ方も音楽的だと義孝は思った。この日の練習が終わるころには、義孝には竹田がますます美しく見えるのだった。

この初日に、義孝は指揮者、チェロのトップ、そ



して竹田の三人の知り合いが出来たことで、この楽団に親しみが持てた。これなら定着できそうだと感じたのだった。

その日下宿に帰った義孝は、先日聞いたこの楽団の演奏会のプログラムを探した。捨てた覚えもなかったが、なかなか見つからなかった。三十分以上もあちこちをひっくり返してやつと、重ねた雑誌の間から見つけた。たしかプログラムに載っていた出演

者名簿で竹田の名前を確かめたかったのだ。フアー  
ストバイオリンの欄に竹田映子という名前があった。  
とっさに『映湖』を思い出した。門田映湖が結婚し  
て竹田姓になったのか。しかもこの名古屋に来てい  
たのか。しかし、『湖』の字が違おうし顔も記憶の中  
の門田映湖とは違う。だがこの同じエイコに因縁のよ  
うなものを義孝は感じた。

「竹田映子か、いい名前だ」

と義孝は思った。そして昼間の彼女の顔を思い出そうとしたが、笑顔の優しい雰囲気と落ち着いた話し声、そして伸びのあるバイオリンの音は思い浮かぶのだが、顔がどうも思い出せない。しかし、義孝はその晩眠りに就くまで竹田映子のことが頭から離れなかつた。そのためか、あるいはいつもと違って女性たちの多い場所にいたせいか、その夜義孝には夢精があつた。しばらく自慰をしていなかつたせいか

も知れない。義孝の夢精に現れる相手は、決してそのときに憧れている女性ではない。この日も、竹田ではない誰かわからない相手が夢に現れたのだった。

次の練習日、義孝は竹田映子と顔を合わせて、「ああ、こういう顔だった」

と改めて思い直すのだった。初対面の印象は優しいというイメージが強かったが、あらためて見ると、

むしろ快活で芯の強そうな感じだった。それにみんなと話している様子もてきぱきしていて自分の考えをはっきり言っているように見える。他にも若い女性は何人もいて、それぞれに魅力的だったが、義孝には竹田映子が特別に輝いて見えるのだった。

二人がお互いのことをゆっくり話したのはその年の合奏団の忘年会が初めてだった。居酒屋の二階の

広いがかなり古びた和室で、畳は黄ばんでところどころ畳縁がほつれているところがある。誰もそんなことは意に介せず、楽しそうである。みんなの話しぶりから、この楽団は毎年ここで忘年会をしているようだ。

義孝と映子は隣り合った席になった。そうなったのはなんとなく両者の暗黙の了解があつたような感じである。騒々しい居酒屋の中、みんな大声で喋っ

ていた。義孝と映子も大きな声で喋った。

竹田映子は市内の大手商社に勤めていた。二十六才で義孝と同じ年だった。バイオリンは子供のときから習っていたが、中学でかつこいい先輩がいますという理由で陸上部に入ってから弾かなくなつて、それまで習っていた先生のレッスンも辞めてしまった。高校でも、今度は自分の意思で陸上部に入つてインターハイに出たこともあるそうだ。オーケストラの

ある女子大に入ってから音楽を思い出して、バイオリンを再開したのだった。両親と暮らしていて一人娘だった。

義孝も大学時代のこと、叔父の会社に勤めていることなどを話した。自分が吉高義孝という変な名前です、そのことで子供時代から嫌な思いをしたことも話した。しかし、この名前は、営業先で名刺を出したときに名前を読んだ相手には、注目されて話の切



つ掛けができて悪いばかりではないことも付け加えた。二人はかなり接近したことを互いに感じた。

そして団内では、義孝は手が早いと言う噂が囁かれていることをある団員から聞かされた。義孝は、こういう場合自分が「手が早い」と言うことになるのかと思った。合奏団の部屋に入ったとき直ぐに映子のことを魅力的だと感じたのは確かだが、先にコーヒーとチョコレートを持って話しかけてきたのは

映子の方だった筈だが。

義孝が入団した合奏団は自らフルートを吹く指揮者が主宰していた。練習場もその指揮者が運営している音楽教室の間口の狭いビルの三階にある、大練習室と看板のかかったあまり広くない練習場だった。そのビルにはいくつもの個人レッスン用の小さな練習室があつて、それらには縦型ピアノ一台と、それ

以外の楽器の生徒が一人入れるくらいのスぺースしかない。だから、二十人くらいの合奏ができる部屋を大練習室と呼ぶのは間違いではなかった。

この日集まった団員は十五人だが、チェロとビオラは一人ずつしかいなかった。義孝の加入でチェロは二人になった。もう一人のチェロはかなり上手な人で、そのときはまだあまり上手いとはいえない義孝だったが、彼の参加でチェロパートとしては何と

か形をなしたのであった。

メンバーはみたところ三十代から四十代くらいが中心で、まだ二十代と思われるのは義孝と、映子以外にもう一人くらいだった。指揮者とコントラバスが六十代のように見えた。十五人のうち十一人が女性だった。

この合奏団では演奏曲目をほとんど指揮者が独りで決めていたようだった。自分がフルート奏者であ

るため必ず一曲はフルートのソロがある曲が含まれていた。また必ず声楽曲をすることにもなっているらしい。それは指揮者が懇意にしている、指揮者と同年輩のソプラノの女性が準団員のような立場で存在していたからである。彼女は、声楽曲の練習がある日だけ練習にやってきた。

義孝が入団してひと月後に若いビオラの女性が一度に二人メンバーに加わった。これで団員募集のキ

ヤンペーンは目的を果たしたことになる。この指揮者には楽器をやっている人を集めてくる特別な能力があつた。名古屋市とその周辺には多くの団員を擁する市民オーケストラをはじめいくつかのアマチュア団体があるが、ここの指揮者が呼んでくる人たちは不思議とそれら他団体には属しておらず、練習日が他の団体と重なつたりすることがないので団員の出席率は良かつた。

このフルートを吹く主宰者兼指揮者は、むかし名古屋の放送局の管弦楽団で吹いていたと言うから、プロの音楽家と言うことになる。しかし義孝の目から見ると、現在の彼のフルートも指揮も、とてもプロと言えるほどではなかった。だが、地元の音楽界での顔は広いようで、いろいろな付き合いの中でいメンバーを見つけてくるようだった。むしろ義孝の場合のようにいきなり募集広告を見て応募してく

るのは珍しかった。それだけでなく、コンサートのときの集客にも、彼は力を発揮した。いつも客席は満席に近い状態であつた。

義孝と映子との関係は清らかに続いていたが、三年も在籍すると、義孝はこの合奏団に物足りなさを感じ始めた。老指揮者の作る音楽には創造性も活気も足りないのだ。それに従っている奏者たちも何と



なく音楽する喜びが横溢しているように見えなかつた。みんなそれなりに上手いので曲はよくまとまるのだが、義孝にしてみると演奏に自発性のようなの  
のが足りないと思つた。それは、小ぢんまりとまと  
まつた、破綻の無い小奇麗な演奏と言つてよいもの  
であつた。

義孝はこのことを映子と何度か話したことがある。  
映子は最初、

「そうかなあ、そう言う風には思わないけど」  
と言っていたが、何度目かに話したときには、

「やっぱり義孝さんが言うように、なんか足りない  
わね」

と言うようになった。

映子は義孝の感想を聞いてから、そのような視点で  
練習を観察したのだろう。

しかし二人はこのような見方を団内の誰にも話さ

なかつた。結局この楽団はフルートを吹く老指揮者の楽団である。団員たちが自由に団のコンセプトを話し合つて決めるようなシステムをとっていないのだ。アマチュアの楽団には珍しく、団費さえ集めていなかつたのである。練習会場は主宰者の建物だし、楽譜のコピーも主宰者の音楽教室のコピー機を使い、出来た楽譜はみんなには無料で配られていた。団員の負担がないことはありがたいようで、団員に意見

を言う権利がないことを意味していた。まったく意見が言えないわけではないが、最終的には老指揮者の意向に沿ったことしか採用されないのである。そのような体制はずっと続いてきているため、団員たちは当たり前前のように受け入れているのであつた。

あるとき、山田美鈴と言う女性団員が客演指揮者を呼ぶことを提案したことがある。山田は竹田映子と同じ女子大の先輩で、その大学で何度も指揮を依

頼したことがあるという人物を合奏団の客演指揮者として推薦したのだ。その指揮者は、いわゆるプロではなく高校の音楽教師をしている人で、出身は東京の音大の作曲科だと言うことだった。当然映子もよく知っている人物で、大学ではアマチュアをよく理解した丁寧な指導で学生には人気があつた。

山田美鈴からの、特に若くて美しい団員の声には甘い老指揮者はこの提案を採用した。早速次の練習

日にその客演指揮者はやって来た。四十代くらいの温厚な紳士で、誰もがこの新しい指揮者の練習に期待感を持った。

練習する曲は、これまで老指揮者が練習してきた曲をそのまま受け継いだ。指揮ぶりも指示する言葉や態度もキビキビしていて新鮮である。これまで何となく馴れ合いのように弾いていたフレーズも、新しい指揮者は的確にポイントをつかんで指示を出し

た。それによつて、これまでに比べると明らかに演奏はメリハリのあるものになった。みんなもいつもより緊張感のある反応をしている。老指揮者は部屋の隅で椅子に座つて練習をじつと見ていた。

この楽団では毎回必ず一曲はフルートのソロが入る曲が取り上げられている。独奏はもちろん老指揮者自身である。今回も「ごしきひわ」という美しい名前を持ったフルート協奏曲が入っていた。この日

「ごしきひわ」も練習された。客演指揮者は、独奏者にも遠慮なく注文を出した。注文と言つてもフルートを吹いている老指揮者の年齢にも配慮した丁寧な言葉遣いであつた。しかし、かつてはフルートのプロとして活動したことがある老指揮者としては、団員たちの前で注文をつけられるのは、さぞかし自尊心を傷つけられたことであろう。

老指揮者の心境をよそに、休憩時間のみんなの会



話はいつもより弾んでいる。紹介した山田美鈴は親密さを見せ付けるように客演指揮者に寄り添って話している。あとで映子が義孝にこつそり話したところによると、客演氏には妻子があるのだが、山田とは関係があるらしいと言うのだった。それはともかくとして、おおむね団員たちの評判は悪くなかった。しかし、次の練習日にその客演指揮者は現れなかった。表向きには、次のコンサートの本番の日が、

客演指揮者の関わる行事とぶつかっていることがわかつたと言うことであつた。しかし、実際には日程の問題はないのに老指揮者が断つたと言う噂が団内で囁かれた。

老指揮者は、自らのフルート演奏に注文をつけられ、自尊心を傷つけられただけでなく、団員たちが新しい指揮者を好意的に受け入れたことが気に入らなかつたようなのである。それに、彼を紹介した美

人団員の山田美鈴は老指揮者のお気に入りで、その彼女が客演氏とやたらに親しげにしていたことも頭にきたと言うもつともらしい理由も噂には付いていた。それでも結局は、客演指揮者を断ったことに誰も口を挟むことはなかった。

会社にも合奏団にもマンネリ感が募ってきた義孝だったが、映子との関係はうまくいっていた。練習

の無い休日には時々二人で出かけることもあった。それは東山動物園だったり、木曾の馬籠だったりした。デートには、そのとき既に免許を取り、手に入っていた義孝の車で出かけた。「愛を弾く女」と言う、バイオリニストの女とバイオリン製作者との恋愛映画を見に行ったこともあった。このようなデートで二人はたくさん話をした。

映子は義孝が音楽について語るのを聞くのが好き

だった。とは言つても、現実に二人が属している合奏団の話になると、指揮者や演奏内容に対する不満ばかりが出てくる。映子が聞きたがったのは義孝の音楽観のようなものだった。

馬籠の宿場跡を歩きながら二人は夢中で話した。

「義孝さんの音楽に対する考え方は、大学時代に培われたのですよね？わたしも大学で音楽をやっていたのに、音楽に対する知識も考え方も深めることは

なかつたわ。ただひたすら先輩とか指揮者とかの要求に従って弾けるようになることだけを考えてやっていたような気がするわ」

「僕も大学の合奏団では弾けるようになることだけしか考えなかつたよ。なにしろ僕なんかそのときチエロを始めたばかりだったからね」

「じゃ、自分で本を読んだりしたわけね？」

「いや、大学に入って最初に入ったのは演奏をする

サークルじゃなくて、音楽芸術研究会って言うサークルだったから、そこで鍛えられて理屈っぽくなつたのかも知れないね」

「義孝さんのは、理屈っぽいとは思わないわ。ちやんとした身についた考え方ね。だって、ただ楽譜にあるとおりに演奏するだけでなく、楽譜の行間を読むって言うか、音楽の背景や作曲家の意図を探ろうとしているでしょ？」

「そんなに立派なことじゃないけど、作曲家の生きた時代や、伝記を読んで議論したりは、よくやったね。でも一番興味があつたのは、生き生きした演奏と退屈な演奏の違いについて考えることだったかな。それで音楽研究会では、自分たちで生き生きした演奏を実現しようと言うことになって弦楽合奏団までを作ってしまったのね」

「わたしみたいに、ただそこにあつたグループに入



つたのとはわけが違うのね」

「僕だって、そのとき演奏するサークルがあつたら、それに入っていたかも知れないよ」

「それで、義孝さんたちは生き生きとした演奏を実現できたのね」

「とんでもない」

と義孝は自嘲的に言った。

「それまでレコードを聞いて、世界の名演奏家たち

をまな板に乗せて何処が良いとか何処がつまらんとか言っていた僕たちが、いざ楽器を持ったら、音階も弾けないよちよちの赤ちゃん状態になってしまったのだからね。音階どころか、ブーツと一つの音さえまともに出せないのだから、生き生きもくそもないよね」

「皆さん演奏するの初めてだったの？」

「そう。でも僕の大学には教育学部の音楽科があつ

て、そこには楽器を専攻する学生たちもいて、その専攻生たちが何人か入ってきたので、初心者たちはその人たちにレッスンを受けながらやつと音階が弾けるようになったり、ごくごく簡単な曲を弾いたりし始めたわけ。わかると思うけど、そんなことで生き生きした演奏なんて遙か雲の向こうで、そのとき  
の僕たちには関係ないことだと思ひ知つたね。でも、僕もだけどみんな猛烈に練習したよ。授業も出ない

でね。それで一年後には《アイネ・クライネ》をや  
つてみようと言うところまで行つたんだ。もちろん  
幼稚な演奏だつたと思うけど、生き生きした演奏に  
は何か必要かを感じることもだけはでき始めたような  
気がしたね。自分たちはそのような演奏は出来なか  
つたけど」

「何が必要だつたの？」

「ひと言じや難しいね。うーん、生き生きした演奏

のイメージを持つことかなあ。それとそのイメージを実際の音にする技術だね」

「やっぱり、技術がないとだめなのね」

「そうだね。必要最小限の技術はないとね」

「最小限でいいの？」

「もちろん技術は有ればあるほどいいに決まってるけど、技術がいくらあってもそれだけでは生き生きした演奏にならないことも確かなんだ。それはい

まの合奏団について映ちゃんも僕がいつも話していることだよ。いまの合奏団の物足りなさはまさにそれじゃないかと思うね。みんな結構弾けるのにね」

「みんな結構弾けるって言うても、あれではまだ生き生きした演奏のためには、やっぱりまだ技術が足りないのじゃないの？」

「そうね、みんなの技術がもつと豊かだったらまじな演奏になる可能性はあると思うけど、やっぱりそ

れだけじゃないと思う。メンバー一人ひとりに、生き生きした演奏というもののイメージが足りないと思う。そう言うものがあれば、もう少しは生きて音楽になると思うけどな」

「わたしも、こんなに義孝さんのお話を聞いても、私自身その『生き生きした演奏のイメージ』を持っていると言う自覚はないような気がする」

「僕は、映ちゃんちゃんの演奏には生き生きした演奏の要

素は備わっていると思うよ。僕が映ちゃんのことを魅力的な女性と思う中には、そのことも含まれているからね」

「嬉しいけど、少しひいきしすぎね」

映子はそう言って、思わず義孝の手を握った。二人はそれをきっかけにしばらく手を繋いで歩いた。二人は初めてお互いの手の柔らかさと暖かさを感じたのだった。



二人は高尚な音楽談義を忘れて無言で歩いた。初めて繋いだ手を通して、お互いの熱い想いが流れたのだった。そのとき義孝は、映子を抱こうなどと想像したわけではないのに、興奮しそうになって困った。義孝は、心と身体は密接に関連していることを実感していた。映子も態度には現さないように努力していたが、体中が燃えていた。しかし、この日のデートもそれ以上に発展することはなかった。

映子としては、相手が求めてこないのだからそれ以上のことはありえないと考えていた。しかし二人の心は決して醒めていたわけではない。

## 合宿

義孝が入って三年目の夏、合奏団は名古屋市の小

んたけ休暇村で合宿を行なった。三千メートルの御岳山の中腹にある施設で、四泊五日の合宿だった。もちろん練習がメインだが、スケジュールにはレクリエーションもふんだんに組み込まれていた。そして三泊目の夜、宿舎内の大部屋で宿泊客が自由に聞きに来ることができるミニコンサートも行った。

義孝と映子は何かと不満を持ち始めていた合奏団だったが、この合宿は楽しい日々であった。特に二

日目の午後、練習を休みにして八合目の田の原自然公園までの登山は、二人にとって特に楽しい時間となった。登山というのは語弊があるかも知れない。みんなは車で田の原の駐車場まで行き、自分たちの足で歩いたのは自然公園に巡らされた約三キロの木道くらいである。しかしここで過ぎた三時間は、義孝と映子にとってだけでなく、団員たちみんなにとって心洗われるひと時であった。標高二千メートル

ル以上の爽やかな空気と壮大な眺望、無数の草花は誰もがいっまでも居たくなるような気分誘われた。

義孝と映子は遊歩道を、肩を並べてゆつくりと歩いた。このころすでに二人の間に、お互いを知るために聞くべきこともなくなっていた。二人はあまり喋ることもせず、同じ風景を眺めながら歩いた。好天に誘われてたくさんの人で遊歩道は混み合っていたが、二人にとって他の人たちはいないも同然に

思われた。しかもただ自然を楽しんでから帰宅し、翌日から仕事と云ういつもの休日とは違って、宿舎に帰れば合奏団のみんなとの食事があり、夜は練習があつた。翌日もまた音楽に浸つていれるのである。二人だけのデートにはない充実感がたまらなくよかつた。

この午後のイベントは、義孝と映子が恋人同士であることを合奏団の全員に知らせてしまうことにも

なつた。

翌日午後の練習の後、夕食までの時間に何人かでテニスをすることになった。前日と違って今にも夕立が来そうな雲行きだったが、宿舎のすぐ近くのテニスコートで合奏団の四人がテニスをした。義孝も参加した。両親の事故で高校のテニス部を辞めてから初めてのテニスだった。映子はテニスの経験は無いと言つて、見学にだけやつて来た。雲行きが怪し

かつたせい、コートは何面もあつたが他にプレイする人はいなかつた。義孝たちはコート二面を使つて、二人ずつでラリーをしたが、客演指揮者を呼んだあの山田美鈴と義孝が特に上手かつた。義孝は高校以来だつたので初めのうちネットに引つ掛けたり、あらぬ方向に玉を飛ばしたりしていたが、直ぐに勘を取り戻して強い球が打てるようになった。映子はそんな義孝を、



「すごい、すごい」

と言つて喜んだ。それを見て山田美鈴が義孝に試合を申し込んだ。義孝たちが試合を始めて間もなく、雷が鳴りだした。見ると真つ黒い雲が上空にある。他の二人は夕立が来そうだから止めようと言ひ出したが、義孝たちは、

「切がいいところで止めるから、先に帰つて」  
と言つてゲームを続けた。他の二人は映子を誘つて

宿舎に戻っていった。映子はゲームの二人を振り返りながら、仕方なく宿舎に帰った。

雨はなかなか落ちてこなかったが、雷は激しさを増した。義孝は相手の背後の上空に稲光が走るのを見た。山田が、

「あと二、三ポイントだからこのゲームだけしよう」と言っ二人は続けた。ゲームはジュースにもつれ込んで長引いた。そのとき激しい閃光と同時に鼓膜

が破れたかと思う雷鳴が炸裂した。それを合図のよう  
に大粒の雨が落ち始めた。二人は大慌てでボール  
をかき集めて宿舎に走った。

宿舎のロビーで映子が心配そうな顔で待っていた。  
そのときまた大きな雷鳴があつて、そこに居たもの  
はみなちじみあがつた。山田美鈴は、

「映子ごめんね」

と意味ありげな笑顔で部屋の方に駆け去った。外は

夕立が激しくなり、雷もひっきりなしに鳴った。

「怖かった」

と映子が義孝に寄り添った。

「バリバリッっていうやつは怖かったよ。雷に打たれなくてよかった」

激しい夕立を見に出てきたチエロのトツプが、

「竹田さん、雷よりも他のことを心配してたみたいだよ」

と映子にも聞こえるように義孝に言った。義孝は初め何のことかわからなかったが、映子がトツプに、「そんなことないよ」

と照れて言うのを聞いて、義孝はトツプが言った意味に気が付いた。そして、山田美鈴が映子に言ったことも理解したのだった。

その夜、ミーティングと言っているが、実は缶ビールなどを飲みながらの単なるおしゃべりの会で、

昨日の田の原での義孝と映子の行動や、夕方のことがみんなの酒の肴にされたのだった。

最終日の夜のミニコンサートには、思いのほか大勢の聴衆が集まった。山の中腹にある施設で、夜は他に何も無いと言うこともあるのだろう。ミニコンサートでは、この合宿で練習した曲目が披露された。それらは秋の定期演奏会で演奏する予定の曲である。このコンサートでは、義孝にとって思いがけない

ことが二つあった。一つは、聴衆の中に義孝の会社の社員が来ていたことである。彼は中学生の男の子と、小学生の女の子と奥さんとの四人連れだった。普段特に親しくしているというわけではなかったが、お互い思わぬところで会ったことにびっくりした。彼らも夏休みを取って休暇村に来ていたのである。昨日は御岳山の頂上まで登ったそうだ。彼の方は義孝が音楽をやっていることを知っていた。義孝が休

日に事務所でチェロの練習をしていることを知っていたのだ。しかしこのようなグループに所属していることは初めて知ったようだった。義孝の方は、彼が夏休みをとって家族連れで御岳に来ることは不思議でなかったが、コンサートを聞きに来たことに驚いた。もちろんどれだけ音楽そのものに興味があったのか、ただ退屈しのぎか子供に引かれてきただけなのかわからないが、とにかく



「こんなところで素晴らしい音楽が聞かれるとは思わなかった」

と言っていた。義孝は翌日には帰宅して翌々日から  
出社する予定であるが、彼らはあと二日信州を回っ  
てから帰るのだそうだ。義孝が出社したとき、御岳  
で出会った社員はまだ出社していなかった。予定通  
り信州を回っているのだらう。この時期この会社の  
社員たちは、それぞれ調整しあって五日間程度の夏

休みを思い思いの日に取りることになつていたので、数日続けて空いたままの席がちらほらあるのだった。

そしてその休暇村のミニコンサートで、義孝にとつてはそれ以上に大きな出来事があった。映子の両親が来ていたのである。コンサートが終わったとき、義孝と同僚との会話がすむのを待つようにして、映子が義孝に両親を紹介した。演奏を終えた合奏団員たちは、自分たちの楽器を片付けてから、会場の席

を元の位置に戻す作業を始めた。義孝は慌てて自分の楽器をしまつてから、映子の両親の待つ廊下に出た。

映子の父親は、黒縁のメガネをかけた如何にも真面目そうな感じだった。母親は映子に似て明るい感じの美人だった。両親は、  
「いつも映子がお世話になつています」と挨拶し、

「今日の演奏がとても良かった」

と言った。そして父親が、

「一度ぜひ家に飯でも食いに来てください」

と義孝を招待した。聞くと、両親はこのコンサートを聞き、義孝に会うためにこの日わざわざ仕事を休んで来たのだそうだ。両親が来ることを映子も知らなかったそうである。

部屋に戻った団員たちは、いつものようにビール

を飲みながらのミーティングを始めた。その席上、義孝と映子の結婚近しとの話題で大いに盛り上がった。

「今晚は二人のために特別室を予約しようか」などと冗談が飛んだ。それでも二人とも、笑顔で適当に話しに加わっていた。しかし義孝は内心、そろそろ真剣に考えなければならぬ事態になって来たことを察したのだった。

## 訪問

ある日、映子は義孝を自宅に招待した。両親に会わせたかったのだ。御岳での合宿のときに映子の両親からじかに招待されていたことなので義孝はすぐに招待に応じた。しかしあれから義孝の結婚に対する考えが進んだとは言い難かった。

竹田映子の住まいは名古屋市東部の比較的新しい

住宅が立ち並ぶ地域にあつた。義孝は車で、映子が渡してくれた手書きの地図を頼りに探しながら訪ねて行つた。家の前には二台分くらいの駐車スペースがあり、緑色のマツダのワゴン車が一方の端に寄せて停めてあつた。

映子の父親は公務員で、御岳でのミニコンサートで会つた時の初対面の印象と変わらないやや堅苦しい感じがしたものの、あるときよりもリラックスし

た雰囲気であつた。そして非常に愛想がよかつた。母親は映子に似た明るく快活そうな感じは初対面のときと変わらなかつた。玄関を通されたときから、飾り気のないどちらかと言うと地味な雰囲気の家だつた。自由な雰囲気の家で育つた義孝は、このように威厳を感じさせない空気を好ましく感じた。

いかにも母親と映子が心をこめて準備したことをうかがわせる手料理が食卓に並んだ。特別高価なもの



のと言う感じは無かったが、どの料理の味も義孝の舌によく馴染んだ。

この日は義孝の両親の事故のことや仕事の話のほかは、広島と名古屋の街や食べ物を比べるような他愛ない話を中心だった。また映子に関しては、彼女の趣味がバイオリン、陸上競技、バイオリンと変転したことなどが話題になった。特に結婚云々という話題は出なかった。

映子は高校の陸上部では主に短距離をやっていて、百メートル十二秒を切ったことがあると言うから高校では全国大会級だったことが話しに出た。そんなレベルなのに大学で何故続けなかったかと言うと、彼女が進学した女子大に本格的な陸上部がなかったからと言う単純な理由だった。現在の映子は色白の美人だが、陸上をやっているころは真っ黒に日焼けしていたそうである。それが大学に入っただけでぱたりと

運動を辞めてからは、みるみる日焼けが抜けて元の色白に戻ったのだそうだ。その後もときどき山に行ったり、市民マラソンに参加したりして、そのときは真っ赤に日に焼けるけれど、直ぐに元に戻るのだそうだ。

大学は、学部と教授で選んだのだった。サークルは、より充実した活動をしていると判断して、陸上部ではなく管弦楽団に入ったのだった。子供のころ

から習っていたバイオリンが生かされて、映子は熱心にオーケストラ活動をしたのだった。

一回目の竹田家訪問は当たり障りの無い話題だけでお開きになった。それでも義孝と映子は幸せだった。映子は、両親が義孝を気持ちよく迎えたことと、義孝が映子の両親の前で打ち解けて過ごしているように見えたことが嬉しかった。義孝の方は、さして新たな感慨と言うものは無かったが、仲のよさそう

な家族だと言う印象を持ったのだった。

さらに一年義孝と映子の清らかな関係は、さしたる進展も後退も無く続いた。義孝の会社での立場も、合奏団生活も変化無くなるとなく続いていた。

そのころ義孝の二度目の竹田家訪問があった。もちろん今度も映子の誘いによるものだった。この度の訪問に竹田家としてははっきりとした目的があつ

た。夕食のあと映子の父親が単刀直入に切り出した。

「義孝さんと映子はずいぶん長く親しくしているよ  
うだが、そろそろ結婚のことを考えてもいいのじや  
ないかな」

「映子ももうすぐ三十になるのだから」  
と母親が言い足した。

映子も特にその話題を嫌わなかつたところを見ると、  
竹田家では義孝が映子との結婚のことをどう考えて

いるのかが大きな関心事になっていたのだと義孝は感じた。母親がさらに付け加えて言った。

「映子の方は義孝さんのことを気に入っているみたいなのだけど、義孝さんはどう思っているのかしら」

本人がいる前での直接尋問である。さすがにこのとき映子は、

「そんなこといきなり聞くの失礼だわ」

と言つて、照れた。

そのころ義孝もいずれは映子と結婚したいと考えていたのだが、あまり気の乗らないサラリーマン生活をしている現状では、いま具体的に話を進める心境になれないでいた。しかし、ここまではつきり問い詰められたら何らかの返事をしないわけにはいかない。

「もちろん僕も映子さんのことを心から気に入って



います。いずれは結婚できればいいと思っ  
ています。でもいまは仕事のこと  
で少し気持ちが揺らいでいる  
ので、僕から言い出せないで  
いたのです。しつかり考  
えて、映子さんを本当に幸  
せに出来るという自信が  
持てたら結婚を申し込みたい  
と思います」と、言葉を選  
びながら言った。

「では、もう少し待つてほ  
しいと言うことですか」  
「はい」

「映子はそれでいいのか」

「ええ、もちろん私は義孝さんがそう考えるのだつたら、義孝さんを信じて待つつもりですわ」

映子の言葉には義孝の考えに満足できないと言うニュアンスが含まれていた。その映子の気持ちを後押しするように母親が口を挟んだ。

「映子がそれでいいのならしかたないけど、歳のことも忘れなさんなよ。私は結婚するんだつたら早い

方がいいと思えますけどね。子供だって、あんまり遅いのは感心しないし」

「まあ二人のことは二人に任せようじゃないか」  
父親が話をまとめるように言った。

義孝と映子は次の練習のあと二人で食事をした。

「この前はごめんなさいね。いきなりあんな話になるなんて思わなかったから」

義孝は、結婚の話が出ることは映子も知っていたの  
ではなかったかと思つたが、そのことには触れず、  
「かまわないよ。僕たちの気持ちはぜんぜん離れて  
いないけど、ご両親から見ると何となく着かず離れ  
ずに見えるんじゃないかね。僕としては、あるとき  
言つたようにいま会社が嫌でいやでしょうがなくな  
っているんでね。辞めたいくらいだけど、ちゃんと  
食つていけるようにしないと映ちゃんを貰うわけに

「いかないからね」

「会社、辞めたいんだ。でもそうなたら私も働いているし、何とかなるんじゃないかしら」

「叔父の会社が嫌というわけじゃなくて、いまの仕事を一生涯することが嫌なんだよね。だけど言っとくけどヒモみたいなことは絶対に出来ないからね」

「そうじゃないでしょ。今の会社は辞めても何か別の仕事見つけるんでしょ」

「まあ、そうだけど。二人にはそういう了解があつても、ご両親は納得されないでしょ？」

「父は何しろお堅い公務員ですからね。でも母は意外と開けてるから味方になつてくれると思うわ」

「いずれにしても、もうちよつと仕事のこと考えを整理するよ」

「あんまりゆつくり考えないでね。私一日も早く義孝さんが欲しいから」

映子が初めて口にした情熱的な言葉だった。義孝は映子を抱きしめたい気持ちであつた。しかしそこはレストランの中だったし、二人はそのとき向かい合つて座つていたので、抱き合つたりは出来なかつた。義孝はテーブルの上に乗つていた映子の手を両手で握つた。その動きがぎこちなかつたので、テーブルにあつたコップの水が少しこぼれた。映子もしばらくそのままにしていたが、通路の向かい側にア

ベツクの客が来たので、義孝は映子の手を離した。この日も二人は、それ以上発展することなく別れた。

実は義孝には、映子に言っていないことがあつた。それを言つてしまうと、映子の両親だけでなく、映子自身にも不安を持たせてしまうような気がしたからであつた。

義孝はこのところ暇を見つけては小説を書いてい



た。本来は小説ではなく、尊敬する音楽評論家の吉田秀和のような、音楽についてのしつかりした文章を書きたいと思っていた。いずれはその分野で権威のある吉田秀和賞を目指すつもりであつた。だが今のところは文章を書く練習のつもりで、ジャンルにこだわらず思い着くままに小説なども書いているのだった。書きあがると条件に合う文学賞の募集を見つけては応募していた。すでに二十作以上応募して

きたが、入賞などはまったく無かった。音楽に関する文章は、小説よりもたくさん書いているのだが、応募に値するようなものが書けたと言う手応えが無かった。目指す吉田秀和賞にはまだ程遠いと考えていた。そもそも吉田秀和賞は、一般応募ではなく出版された評論の中から選ばれるので、そのような機会を作らなければ受賞することはない。

しかし義孝の人生を変えることになる運命の悪戯

が起こる。義孝がちようど三十歳になつた誕生日に投函した懸賞小説が一席になつたのだ。

一席になつたのは、ある大手文芸雑誌社が募集した新人賞である。作品は不倫をテーマにした恋愛小説で結構性描写も盛り込まれたものだったが、ドラマ性がたまたまうまく書けたことと、読み易い文章が良かったのだらうと義孝は分析した。もちろん吉高義孝という本名ではなく、吉風太郎というペンネ

ームでの応募だった。

義孝は仕事に嫌気が差して文筆生活を夢見るようになっていたのだが、それが優雅な生活でないことは容易に想像できたので、しようもなくぶらぶらすることを想定して考えたペンネームだった。

受賞した雑誌社からは、受賞作の掲載のほかに一編別の作品の依頼があった。風太郎は書き溜めてあった作品の中から一つを選んで手直しをして雑誌社

に送った。しかし担当の編集者はあまり評価しなかつた。それで何箇所もの大小の手直しを求めてきた。風太郎がそれを受けて書き直すこと数度、やつと活字になった。

その雑誌社からのさらなる執筆依頼は無かつたが、別の大衆雑誌の出版社から話があつた。大衆雑誌の編集者が直接風太郎に電話でアポイントを取つてきた。風太郎はその編集者と喫茶店で会つた。編集者

は伊藤と言った。伊藤は新人賞受賞の祝いを言ったあと、風太郎の第二作も読んだと言った。

「受賞作に比べると、第二作はずいぶんとトーンが違っていて先生らしくないと思いました」

『先生』と言われたのが風太郎にはくすぐったかった。

「あれは、ずいぶん編集者に手直しさせられたから。僕なんかたまたま受賞しても、まぐれみたいなもの

でまだまだ実力なんて全然ありませんから」

謙遜ではなく風太郎は本当に自分のことをそう思っていた。

「先生のその謙虚なところがいいですね。我が社として先生先生の受賞作のような生き生きしたと言うか、生々しいと言うかそんな作品を書いていただきたいとお伺いしたわけです。いかがですか。お願いできますね」

風太郎に自信があつた訳ではないが、執筆生活に自分の人生を賭けたいとの思いからこの依頼を受けた。

求められた内容はやはり恋愛小説だった。恋愛小説と言うよりむしろ愛欲小説と言うべきものだった。雑誌社の名前から義孝には最初から予想がついていた。この原稿依頼には二百枚前後という分量と、二ヶ月という期限がついていた。これまで気ままに書



いて、書きあがった頃にちょうど切がある懸賞に応募していたので、いきなり二ヶ月、二百枚という条件には緊張した。

これを機に義孝は会社から辞表を出した。小説を書くためと聞いて叔父は驚いた。義孝の将来を心配して小説を書きながらでも今の仕事なら続けられるだろうと思いとどまるように説得した。叔父は、「小説家志望なら、それはそれでいいが、せめて目

鼻がつくまで月給取りを捨てない方がいいぞ」と理解のある説得であつた。

しかし、依頼された二百枚に全精力を傾けて、ぜひとも評価されるものにしたいたいと思つている義孝の決意は固く、翻意の見込みが無いことを知ると叔父は辞表を受け取つた。義孝はこのことを竹田映子に何の相談もなく進めたのだつた。

## 別れ

会社を辞めてしまったあと話を聞かされた映子は驚いた。そもそも彼女は義孝が小説を書いていたことを知らなかった。それが何事も無いように練習で顔を合わせていた数ヶ月の間に、受賞、執筆依頼、退社と展開していたのである。映子は驚いただけでなく、結婚に対して大きな障害が発生したことを直

感したのだった。

「受賞おめでとうつて言うべきなんでしょうけど、私たちの結婚大丈夫かしら」  
そう言う映子の表情が曇っていた。

「これは僕が、自分の納得できる生き方を選んだと  
言うことだから、それでもよかったら、僕としては  
映ちゃんには僕と一緒に歩いてもらいたい。でもご  
両親がこれでも賛成してくれるかどうかは僕もちよ

つと心配だし、映ちゃん自身の気持ちも聞きたいね」  
「話してくれなかったの、わたしが反対すると思つたのね」

「そう言うわけじゃないけど、話がばたばたと展開してしまつたから」

「話すチャンスがなかったって言うの？」

「そう言うわけじゃないけど」

「そればかりね」

「怒ってるんだね」

「ごめん。別に義孝さんが悪いことしたと言うんじゃないのだから、冷静にこれからのことを考えないとね」

「僕も勝手にことを進めてごめん。でも映ちゃんも結婚したいのはいまも変わってないからね」

「もちろん、私の気持ちもぜんぜん変わらないわよ。わたしは義孝さんが、本当にやりたい仕事をしてい

る方がいいから、それが小説家だったらそれでも全然構わないのよ。だけど、親の説得には苦勞しそう」

映子は自分の親、特に父親を説得できるか自信が持てないようすであつた。

「結婚したら、私、お局と言われようと何と言われようと会社に居座つて、義孝さんが大作家になるのを支えるわね」

「嬉しい言葉だけど、映ちゃんにそんな苦勞はかけ

られないよ」

「そんなの苦勞とは言わないの。好きな人を支えるのも愛の大切な部分でしょ。それより受賞作や第二作、読ませてよ」

義孝にとっては言われたくない言葉だった。明るく健康的で穢れない映子に何の主張も無いような興味本位の不倫小説を読まれたくなかった。映子の美しさを汚すような気がするのだった。



「たいしたものじゃないから読まん方がいいよ。僕がぜひ映ちゃんに読んでもらいたいと思うものが書けたときには必ず進呈するから」

「でも読んでみたいな。だって受賞者には出版社から一冊や二冊届けられるんでしょ？義孝さん手元に持ってるわよね。いまから義孝さんのアパートに行こう」

「今日はいいよ。次の締め切りまでに一生懸命書い

てるところだし」

「どうして？」

「どうしてって。僕が本当に書きたいものじゃないから」

「でもさ、わかった。ポルノ？」

「ポルノじゃないけど、それに近いかも知れない」

「いいじゃないの。義孝さんの書いたポルノ読みたい」

「わかったよ。恥を偲んでお見せするよ。今度持ってくるからね」

「こんど？」

こんなに甘えたようにすねてみせる映子を、義孝は初めて見るような気がした。結婚を親に反対されそうになったことを忘れたいのだろうか。

「それより、お父さんの説得頑張ってほしいね。僕は必ずちゃんとした文筆家になるから」

「わかった」

小説家といわずに文筆家というのには義孝のこだわりがあつた。

映子は、初めて風太郎の小説を読んで、濃厚な性描写に義孝の知らない面を見るような気がして戸惑いを感じた。なにしろそのとき義孝はまだ映子に手をつなぐことしか求めていなかつたのだから、映子

の戸惑いは当然であつた。しかし文章は、濃厚なだけではなく、読むものを官能に誘う雰囲気が見事に書かれていて感心したのだつた。映子は自らも密かに興奮しながら一気に読み通した。これだけ読ませるものが書けるのだつたら義孝はきつと小説家としてやっつていけそうだと映子は思った。

映子は両親に、義孝が小説家になろうとしてすでに会社を辞めてしまつていることを話した。そして

自分としてはその義孝についていききたいと思つてゐること、義孝からもそんな自分でよかつたら結婚して欲しいと言われたことを話した。それを聞いた両親は考え込んでしまった。

案の定、両親の態度は一変した。義孝に早く結婚を決断して欲しいと迫つていたこれまでとは百八十度転換してしまつたのだ。

「一回くらい受賞したと言つても、芥川賞のような

賞じゃないのだろ。それで小説家としてやっていけると思うのは、お前も義孝君も甘すぎるんじゃないか」

「甘くなんかないわ。私、仕事を辞めないで、義孝さんが作家として安定するまで支えようと思うの」

「既に結婚している夫婦が、会社が倒産したりリストラされたりして、止むを得ず夫婦力を合わせてやっていくと言うのなら当然そうすべきだが、これか

ら結婚すると言うのに敢えてそんなリスクを背負い込むことはないじゃないか。お父さんははつきり言つて反対だな」

「おかあさんは？」

「わたしもみすみす映子が苦勞するようなところに送り出す気になれないわね」

「でも、お父さんもお母さんも私が義孝さんを好きだと言ふことを考えてくれないじゃないの」



「好き嫌いは一時のことだよ。結婚生活と言うものは好きなだけで成り立つものじゃないんだ。なあおかあさん」

「まあ、そういう面もありますけど」

「お父さんもお母さんも、義孝さんのことを良い人だっけ言っていたじゃないの。それで早く結婚しなさいって言っていたじゃない。それが職業を変えるって言ったらどうして急に変わっちゃうの」

「私たちは、映子が不幸せになるところを見たくないんだよ」

「不幸せになるなんて、決まってるじゃないでしょ」

映子は涙声になつて訴えた。

「義孝君の書いたものを読んだことはあるのか」

映子はドキツとした。別に悪いことをしているわけではないが、あの小説を父が読んだら義孝の評価がさらに下がることはあつても上がることはない。

しかしいつまでも義孝の本を読んだことを隠しおおせないと思つた。自分が読んでいないと言うのも不自然だと思つた。映子は覚悟を決めて、義孝に借りた二冊の雑誌を部屋から持ってきて両親に見せた。一冊の表紙には

「新人賞受賞作発表」

と金文字で書いてあり、その横に

「吉風太郎作『不倫の果て』」

とあつた。

「この風太郎というのが義孝君のことかね。『不倫の果て』ね」

映子は、父の表情から義孝に対する軽蔑を読み取つた。父はパラパラとそのあたりのページをめくつたが読もうとはしなかつた。母も父が持っている雑誌を、いかにも見てはいけないものを見るように覗き込んで、自分では手に取ろうとしない。

「どうやら私たちは義孝君を見損なっていたようだな」

父のこの言葉に映子は絶望感を味わった。そして義孝を恨んだ。どうして結婚したあとでこのような展開にしてくれなかったのかと。結婚してしまっただけからだったなら、いくら父が見損なつたと言つても、もう後の祭りである。

この夜は平行線のまま、映子にとって深刻な家

族会議はお開きになった。平行線とはいつても状況は、事実上結婚できない方に大きく傾いたと言えるのであつた。映子が義孝と駆け落ちでもしない限り、一緒になることはできそうにもなかつた。その夜二冊の雑誌は誰にも読まれずに居間の机に置かれたままだつた。

翌日も雑誌は同じ場所にあつた。父と映子が出勤したあと、母はおそるおそる雑誌を開いた。まず受

賞作を読み始めた。これまで読んだことのない分野の小説だったが、母は引き込まれて二時間ほどで一気に読み終えた。読んだ内容を誰にも話すことは出来ないと思つたが、強く印象に残つた。久しぶりに官能が疼きさえした。すぐにもう一冊の方も読み始めた。こちらの方が短かつたのですぐ読み終えたが、受賞作ほどの印象は受けなかつた。しかし、いずれも文章力のある作品であることは感じたのだった。

これなら、現実に賞を取ったのだし、頑張れば小説家としてやっていけるかも知れないとも思った。しかし、この内容では夫は娘をこの人のところに嫁にやるとは言わないだろうとも思った。

その夜、父親は映子よりも早く帰宅した。帰宅するなり、

「映子はまだか、あの男と一緒になのか」と声を荒立てた。



これまで義孝君と呼んで、あの男などと言ったことはなかった。きつとどこかで問題の小説を読んできたのだらう。それを察した母が、先手を打つように言った。

「わたし、義孝さんの小説読みました。不倫がどうのこうので読むのも少し恥ずかしかったけど、内容はともかくとして力はあるかも知れないと思いましたよ。もし小説家としてやっていけるのなら映子を

義孝さんと結婚させてやってもいいんじゃないですか？」

「小説家の生活なんて、それこそ『不倫の果て』みたいなことを実行するに決まっている。映子の不幸は火を見るより明らかじゃないか」

『不倫の果て』は、主人公の男が結婚前から付き合いのあった女性とあるところで偶然出会ったことから、愛が再燃して新妻が哀れな人生を歩むと言う筋

で、昔の愛人と新妻との性生活の微妙なニュアンスの違いが見事に書き分けられているのだった。また少しづつ夫が遠くなると感じる新妻の状況に読む者の同情を惹くところも上手く書かれていた。

「そうとは限らないでしょ。映子も三十になるのですから、よく考えていると思いますよ」

「恋に目がくらんだ娘の考えなんかあてにはならんよ」

「我が子を信じるといふやり方もあるんじゃないですか」

「お前は、結婚に賛成するのか」

「映子に任せたらいいって思うんです」

「それでも親か？娘がみすみす不幸になるのを心を鬼にして防ぐのが親の役目だろうが」

結婚を親に反対された娘の反応には二通りある。

反対されて逆に、どんなことをしても絶対に結婚してやるんだと言う反骨タイプと、悔しいけど仕方ない諦めるタイプだ。もちろんそれぞれの結論に至るまでには辛い煩悶の期間があるのは当然である。竹田映子の場合は後者のタイプだった。映子の積極的な性格からは想像しにくいだが、一人っ子のためであるろうか。

映子から、父親が強力に反対していることを聞い

た義孝は、何とか説得できないかと迫ったが、映子は諦めムードを漂わせるばかりだった。そしてその話になると涙ぐんだ。そんなに辛いのだったら義孝自ら父親のところに行こうかと言っても、そんなことをしても逆効果になるだけだと言って義孝の申し出を断るのだった。

映子の諦めの気持ちを悟った義孝は映子と同じ街に住んで、同じ合奏団にいるのが辛くなってきた。

義孝は気持ちに整理をつけるために、郷里の広島に帰ることを考え始めた。小説の仕事はどこにいてもできる。

義孝は、今は誰も住んでいない広島のことを考えた。義孝の両親は十三年前にドライブ旅行の途中で交通事故に遭って二人同時に他界している。両親がいなくなつてからも大学を出るまで住んでいたその家は、義孝が名古屋に就職してから放つたらか

しになっている。その家が、七年以上も放置されていて住める状態かどうかわからなかった。義孝はそれを確かめに行くことにした。

義孝は昔から世話になっていた向かいの家到手土産をもつておよそ七年ぶりに帰省した。

家は昔のままあった。義孝は自分の家に入る前に向かいの家を訪ねて来意を告げた。向かいの主人は、



空き家になつてからしばらくは、ときどき草を刈らせて貰つたが、自分が身体をこわしてしまつて、いまは伸び放題になつていて申し訳ないと言つた。何も管理を頼んでゐるわけでもないのに、かえつて義孝は恐縮した。草刈をしてくれたのは、管理と言うより周囲の農地にとつてありがたい状況だからでもあつた。

義孝が住むことが出来るだろうかと思ひを求め

と、しつかりした家だから多少は手を入れる必要はあるだろうが、充分に住めるだろうと言ってくれた。

庭には伸び放題の雑草が背丈ほどにもなっていて、踏み石を辿りながらやつとのこととで玄関にたどり着くといった有様であった。家の中は庭ほど酷くなかったが、どこから入り込んだのか虫の死骸が無数に転がっていて、蜘蛛の巣もいたるところにかかっていた。

義孝は台所の埃だらけの椅子に座って、ぼんやりと考えた。自分の家はこの通り荒れているが、周囲は以前住んでいたころのまま自然に囲まれた静かなところである。どこかから草刈の音が聞こえてくる。環境は、大都会の街中にある名古屋のアパートとは雲泥の差である。静かに執筆活動をするには、こちらの方がよほど向いている。こう考えるうちに、義孝の中でここに住むという考えが固まってきた。多少

手を入れなければならぬにしても、向かいの主人が言うように充分に住めそうだ。手を入れると言っても、大金をかける必要もなさそうだ。ここで執筆をしながら、広島で自分の楽団を立ち上げよう。広島なら、いまも音楽を続けている学生時代の音楽仲間もいるはずだ。気の合う仲間を見つけて本当にいい音楽を目指すアマチュア楽団を作ってみたい。義孝の胸に、ここでの生活に対して期待が湧き上がる

のだった。

ただ、そこに映子も加わってくれたらどんなにいいだろうと考えたが、それはまったく矛盾した想いだった。広島に住むことを考えたのは、結婚の可能性がなくなつた映子から離れるためだったことを義孝は思い出した。

義孝は、そのような考えを胸に名古屋に戻つた。

義孝は映子と会つて、広島に住む計画を話した。映子は、ただでさえ遠のきつつある義孝との結婚が、手の届かないところまで遠のいてしまったと感じた。映子は人目も憚らず泣いた。親に結婚を反対されだしてから、映子はよく泣くようになった。距離的に遠いだけでなく、自分がいまの仕事を続けて、作家として不安定な義孝との生活を支えると言う選択肢もなくなることを意味していた。駆け落ちのように

して義孝について行き、見ず知らずの広島で新たな職を見つけると言う考えは、映子にはとても現実的ではないと思えた。しかも、義孝が住もうとしているところは相当田舎らしい。

義孝からその計画を聞いた映子は、涙顔でただ黙っているだけだった。義孝としては、本来活発な性格の持ち主である映子に、「それでもついて行きたい」

という言葉を、多少は期待したのだが、それは聞かれなかった。のびのびと育つてきたように見えても、公務員の家庭に育つて堅実な考え方が身にしみついているのだと義孝は思った。

いよいよ諦めざるを得ないことを悟った義孝は、映子ではなく、自分の生き方を選んだ自業自得とわかつてはいたが、あの荒れた家に一人で帰っていく自分の姿を想像すると寂しかった。



義孝は、二百枚の原稿を締め切りぎりぎりに間に合わせたあと、広島に住むことを叔父に告げ、家の手直しを業者に頼むなどのために三度広島と名古屋を行き来した。

いよいよ名古屋を引き払う時期を決めてから、もう一度映子に連絡を取った。最後に食事を一緒にしたいと言う申し出であつた。その前に合奏団でささやかな送別会をしてくれたのだが、映子は都合が悪

いと言つて送別会を欠席していた。義孝の申し出に、映子はそんな寂しい食事はいやだと言つていたが、義孝の強い希望に折れて食事をすることになった。

寂しい食事はいやだと言つた映子だったが、意外に元気な姿を見せた。そして義孝の今後の計画と言うのを盛んに聞くのだった。その後も原稿依頼があるのかどうかも聞いた。二百枚のあと同じ出版社から百枚程度の依頼があることを義孝は話した。義孝

のことに興味を示す映子に、自分への関心が高いと感じた義孝は、まだ脈があるのかと思ったくらいである。しかし、そうではなかった。そして思いもよらない提案が映子の口から飛び出したのだ。

「引越しのとき義孝さんは自分の車で広島まで行くのですよね。そのとき私も義孝さんの車に乗せて行ってもらえないかしら？」

義孝は突然駆け落ちを持ちかけられたのかと思った

が、違っていた。

「途中まで送って行きたいの。途中の何処かで温泉にでも泊まってお別れしたいの。私はそこから電車で帰ることにするわ」

それにしても、結婚を口にしながらも手を繋いだことしかないような二人にしては、ずいぶん思い切った別れ方ではないか。義孝は驚いた。

「いったいどうしたと言うの？」

「ちようど合奏団が連休に神戸で演奏することが決まったの。だいぶ前から話が出てたから知ってるでしょ。それが具体化したの。神戸の何とかいう合奏団と交流するのだけど、それに参加するついでに私だけ別行動で先に出かけて、合奏団とは向こうで合流することにするわ。それだったら家にもちようどいい言い訳が出来るし。義孝さんの広島行きの日はそれに合わせてもらおうの。だめ？」

「神戸バロック何とかのこと？決まったんだね」

「で、乗せて行つてくれる？」

「僕は、日にちは特に決まったものはないから自由に決められるけど、そんな風に言つてくれるのは夢のように嬉しいけど、やっぱり駆け落ちではないんだね」

「ごめんなさい。私に兄弟でもいたら駆け落ちも考えられたかも知れないけど、一人っ子でしょ。あの

両親を残しては飛び出せなくて。ごめんなさい。でも私の義孝さんへの想いをしつかりと心に刻んでほしいの」

「嬉しいよ。でも箱入り娘がわざわざ傷物になるよ。うなことをしてもいいの？」

「ポルノ作家なのに古い言葉を使うのね。だめなの？それとも私のお願いを聞いてくれるの？」

「わかった。じゃあ、出発は大型連休の初日の朝な

らいいんだね。気が変わったらキャンセルしてもいいからね。映ちゃんの気持ちはよくわかったから無理をしないように」

「キャンセルなんかしないからね」

「わかった。温泉じゃないと駄目？」

「それはビジネスホテルでも何でもいいの。長い時間義孝さんと車に乗っていただけだから」  
そう言ったとき映子の目に涙が溜まった。



義孝は、映子がただ親の言いなりになつて結婚を諦めようとしているのではなく、並々ならぬ思いで諦めようとしていることを知つて、胸が熱くなるのだつた。

義孝は早速Xデーのドライブ計画を立てた。しかしそれは映子のために特別の新たなコースを考えるのではなく、もともと義孝が考えていたのとあまり違わないコースだつた。少しでも長い時間一緒に

車に乗っていたいと言う映子の言葉を生かして、高速道路を使わないことにした。国道一号線から二号線に入り、神戸から三木を通って山陰に出るコースである。義孝は広島に帰る途中伯耆大山と三瓶山を見て行きたいと考えていたのである。そして映子とは途中福知山か和田山のあたりで一泊して、映子を福知山線に乗せて神戸で合奏団に合流できるようにすることにした。

義孝と映子の、お別れドライブは快晴の朝始まつた。映子はバイオリン、演奏会用の衣装、楽譜などを持って名古屋駅前で待っていた。

あまりの好天に義孝は当初計画していたコースを変えた。国道一号線で京都まで行ったが、そこから綾部を通って天橋立、城之崎を経由した。城之崎は泊まるのにいいところではあるが、時間が早かった

のと、翌日映子は神戸に行かなくてはならない。城之崎では神戸に遠すぎる。義孝たちはそこから南下して和田山に達した。田舎にしてはやや大きなビルを構えたホテルが目に入ったので、訪ねると空部屋はあると言う。ビルは大きかったが、中に入ってみるとビジネスホテルに毛の生えた程度だった。映子もここでいいと言うので決めた。チェックインしたあとすぐに街に食事に出た。荷物を置きに一度部屋

に入つたが、二人ともいそいで部屋を出た。初めて二人だけで入つたホテルの部屋で、二つ並んだベッドを見て二人とも落ち着かなかつたのだ。三十にもなつた二人だつたが、このような経験は一度もなかつたのである。

どんな店があるか特に当てもないので、ホテルのフロントで教えてもらったファミレスに行つた。アルコールを飲まない二人は、こんなときの食事の様

子は絵にならない。ありきたりのファミレスの定食を食べながら、二人の間にはあまり話が弾まなかった。明朝の別れのこと、二人を無口にしていった。

食事がすむと再びブラブラ歩いてホテルに帰った。これから起こるであろうことに二人とも戸惑いがあることもいつそう無口にしていった。部屋に入ると二人はどちらからともなく抱き合った。しばらくそうしていたが、映子の方から唇を求めた。長い接吻で

あつた。義孝の体の隅々にまで、初めて抱きしめた映子のぬくもりが染み渡つていった。義孝は、やや小柄な映子が強く自らの身体を押し付けてくるのをすつぽりと腕の中に抱いた。ようやく離れると、義孝は、映子にシャワーを勧めた。

映子は黙って頷くとホテルの浴衣を持ってシャワー室に入った。義孝はテレビをつけてニュースを見た。世の中に特に変わったことは起きていないらし

く、ゴールデンウィークの各地の混雑のようすを伝えていゝる。天気予報では明日もよく晴れるらしい。

明日になると映子は演奏会のために神戸に向かう。それは永久に別れることを意味しているのである。義孝がぼんやりそんなことを考えていると、浴衣に着替えた映子が、脱いだ洋服を抱えて出てきた。化粧気がまったくなく髪を無造作に後ろに束ね、少し湯で火照った頬をした映子は、美しく、そして色つ



ぽかった。

「お先に。汗流して気持ちよくなつたわ。義孝さんもどうぞ」

と言つた。

義孝は後ろ向きになつて浴衣をはおり、着ているものを脱いでシャワーに入った。映子は義孝が点けたテレビのチャンネルを回してみたが、受信できるチャンネルの種類は少なく、面白そうな番組も出て

こなかつた。映子はテレビを消して、鞆から明日練習があつて、あさつて本番の演奏会で弾く曲の楽譜を取り出して、目で譜面を追いながらイメージ練習を始めた。

義孝がシャワーから出てきたので、映子は備え付けの湯沸しを使って茶を入れた。二人は熱い茶をゆつくりとすすつた。

「義孝さんの小説では、こういう場面はどんな風に

書くの？義孝さんは、女の人とこういう場面を何度も経験しているの？」

「初めてだよ。小説は想像して書くだけ」

「じゃ、小説のためにも貴重な体験ね」

映子はまるで他人事のような言い方をした。

「映ちゃんは何回目？」

「バカ、初めてに決まってるじゃない」

「お互いに三十にもなつて、遅れてるね」

「いいの」

義孝は映子の手を取ってベッドに誘った。

「わたし、遅れてるかもしれないけど、一応三十にもなる女ですからね」

映子はそう言いながら義孝に抱きついてきた。二人は別れの前夜になって初めてひとつになつたのだつた。

翌朝早く、ホテルのあまり美味しいとは言えないバイキングの朝食をすませて、義孝は映子を福知山駅まで送った。駅前で映子を降ろした。義孝は一度も振り返らずに駅の中に消える映子を、胸の張り裂ける思いで見送った。映子は朝から明るく振舞っていたが思いは同じであつた。映子は列車の席で人目も憚らず泣いた。一方の義孝も、国道九号線を北に走りながら涙が止まらなかつた。涙で前方が見えに

くくなるので困った。

義孝はこの日、伯耆大山の雄大な姿を眺め、夕方には島根の三瓶山の優しい姿を眺めるうちに、溢れていた涙はゆつくりと体の隅々に沁み込んでいき、  
瞼を濡らすことはなくなっていた。

夜遅くこれからの人生を送る家に着いた。家の手直しを頼んだ工務店に、庭と室内の清掃まで全てを

頼んであつたので、下見に来たときからは想像もつかないくらい綺麗になつていた。先に送り出した引越し荷物は明日着くことになっている。とは言つてもその荷物はほんの僅かである。引越し業者の二ト  
ン車一台だけである。

向かいの家に挨拶をしたら、引越し荷物のことを聞かれ、明日着く予定だと言うと、今夜は自分の家に泊まらないかと勧めてくれた。義孝が大丈夫だか

らとその親切な申し出を断わると、ここはまだ寒いから布団を貸そうと言ってくれた。それも、昔からの布団がそのままになっているし、毛布を持ってきているからと丁寧に断わった。義孝は車に積んでおいた毛布二枚にくるまって寝た。もう五月なのに、湯来の夜中は相当寒かった。押入れから布団を出して被ったが、かび臭さで息がゼーゼーして苦しく、我慢ならなかった。持ってきた毛布二枚で我慢す



ることにした。それにしてもこれほど寒いとわかつていたら、向かいの家の申し出を聞いて布団くらい借りればよかったと思つたが、後の祭りだつた。義孝は寒さと、昨夜の映子とのこととでほとんど眠れなかつた。

電気、井戸、プロパンガスは手直し工事が始まるときに使えるようにしておいたので、朝は、車に積んできたヤカンで湯を沸かし、インスタントコーヒ

ーを入れ、途中で買ってきたパンで朝食をとった。

湯来での初日は、これからの生活を立ち上げるこ  
とから始めなくてはならない。洗濯機、テレビ、電  
子レンジ、冷蔵庫。そういったものは名古屋のアパ  
ートで使っていたものを持ってきたので、荷物が着  
けば直ぐに使える。もともとこの家にあつたそうい  
つたものは永年放置してあつたので、すべて業者に  
廃棄を頼んであつたので、何もなくなつていた。あ

とは電話、新聞、近所への挨拶。役所への住民登録、年賀状をやり取りしている人たちへの転居通知などなど、ひとり暮らしといえども結構面倒なほどあるものだ。義孝は精力的にそれらを一つずつ片付けていった。ぼんやりしていると映子のことや浮かんできて辛かったので、ことさらに忙しく動いたのだった。

## 風のアンスンブル

義孝の広島での生活が始まった。いまや生業となつた小説は、受賞を知つて原稿依頼をしてきた大衆雑誌社からの依頼が続いており、小さな連載も一本持たせてもらつていた。しかしこれだけでは生活保護よりも少ない収入だった。まさに風太郎の生活である。

(ところでこれからは、吉高義孝をペンネームの吉風太郎、あるいは風太郎などと呼んで、曲がりなりにも作家となつた彼に敬意を表することにしよう)

風太郎は小説を書き、チェロを弾き、草刈りをした。チェロは、巨匠カザルスのように毎朝聖書のようにバツハを弾くと言うような崇高な行為のためで

はなく、合奏団を立ち上げるときのための大切な準備のひとつと言う目的のためであつた。

草刈機は近所の農協で買った。夏に向かう季節である、三週間も放っておくと雑草が目立ってくる。近所の人たちもこまめに草刈をしているので、風太郎もサボるわけにいかない。それにしても、空き家にしていた間、近所の人たちはさぞかし眉をひそめて風太郎の家の伸び放題の雑草を見ていたことだろ

う。後で聞いたことだが、初めのころは向かいの主人が、風太郎の家のまわりにある自分の家の畑の草刈のついでに、風太郎の家の草も刈ってくれていたそうだが、その主人が身体を壊してからは放置されるようになり、見かねた人がたまに刈ってくれることもあったらしいが、ほとんどは伸び放題の状態だったそうだ。その話が出ると、風太郎は身を小さくして詫びるしかなかった。長く空き家にする場合は、

しかるべき人に礼をして草刈を頼んでおくべきだったのである。

とにかくいまは、風太郎は草刈をこまめにするだけでなく、近所の山に登り、時には三瓶山まで出かけて行ったりもした。

三瓶山では、こんな経験をした。西の原の駐車場に車を止めて、さあこれから登るぞと言うとき、に



わか雨が降り出した。西の方の空を見ると明るい。雨は直ぐに止むと見て風太郎は雨が上がるのを待つことにした。朝の天気予報では、この日は崩れることはないと言っていた。

見ると、二十メートルくらい先にも、やはり車を止めて登山靴をはいた人がいた。風太郎は、その人も雨が上がるのを待っているのだと思って近づいていった。遠くからはわからなかったが女性だった。

しかも若くて綺麗な人だった。だからと言うわけでもないが、風太郎は声を掛けた。

「ちようど悪いときに降り出しましたね」

「途中でなくて良かったですよ。これ直ぐに止みますよ」

女性は落ち着いている。彼女が言うとおりの雨は五分もしないうちに小降りになり、やがて止んだ。雲が切れて直ぐに日が照り始めた。雨の前よりも暑いく

らいだ。

車でシートを倒して休んでいた風太郎は、休む間もなく止んでしまったので、しかたなく起き上がった。見るとさっきの女性はもう西の原のかなり先を歩いている。彼女も直接男三瓶に上るらしい。風太郎は先を越されたような気がして、急いで歩き始めた。彼女はもう草が刈つてある部分を過ぎて、背丈のある灌木の辺りに達して、やがて姿が見えなくな

つていった。

風太郎は、彼女を追いかけるような気持ちになつて歩いた。このコースは登り始めると一気に急な登りが続く。西の原から見上げると、頂上付近まで登山道が見えるコースである。木陰が一切ないのでさつきの雨が嘘のように陽射しが強い。風太郎が樹のない登山道に取り付いたところ、彼女は遥か上の方を元気な足取りで登っていた。風太郎は、姿が見えた

ので追いつけるかも知れないと思つて、ペースを速めてみたがとてもそんなペースでは歩けないことがわかつて、自分のペースに戻した。一時間半くらいで男三瓶の山頂に着くと、さっきの女性がリュックを下ろして日本海の方を展望している。風太郎は傍に行つて、

「速いですね」

と声を掛けた。女性は振り返つた。笑顔が美しい人

だった。

「これくらいで歩かないと、一周できなから」

「縦走されるのですか」

「ええ、ここに来たときは大抵縦走です。子三瓶は省略することもありますけど。どうです、ご一緒に一周しませんか。私もあの駐車場まで帰りますから」

「全部で、何時間くらいかかるのですか？」

「そうね、調子がいいときには六時間弱かな。でも

今日は出発が早くなかったから孫三瓶から降りて車道を歩いて駐車場まで帰えることにするかも知れません」

「でもさつき前の方を登って行くあなたの姿が見えたけど、相当なペースでしたよね。あんな調子ではとても歩けそうにありませんから、遠慮します」

「大丈夫ですよ。ペースはお互い調整しながら行きましょう。今日は人が少ないから、私も連れがいた

方がありがたいです」

「迷惑をおかけしそうだな」

「大丈夫、大丈夫。行きましよう」

積極的である。風太郎は自分の体力にやや不安はあったが、彼女の屈託のない笑顔に釣られて同行することにした。

「島田と言います、よろしく」

綺麗な顔立ちをしているが、ボーイッシュな女性で



ある。

「吉高です。よろしく」

「そうと決まったら出かけましょう。お弁当は女三瓶でしましょう。お弁当、お持ちなんですよ？」

「持ってます。わかりました」

この縦走のリーダーは間違いなく彼女である。

二人はほとんど話をせずひたすら歩いた。もともと一人歩きのつもりだったのだから、お互い話す必

要も無いのだ。やはり相当のペースであつた。風太郎も近所の山を歩いたりしているので、なんとか付いていくことができたが、凄いい女性だと思つた。女性登山家に凄いい人たちがいることを風太郎も知つていたが、この人も大したものだと思つた。

一時間足らずで女三瓶山頂に着いた。鉄塔ばかりの山頂から少し下がったところに休憩できるところがあると言う彼女に従つた。

「来たときはいつも縦走」

と言っていただけに、三瓶のことを知り尽くして  
いるようだ。風太郎も、子供のころから親に連れられ  
てよく来ていた三瓶だが、そのときはこのような豪  
快な歩き方はしていない。西の原でゆっくり遊んだ  
り、せいぜい男三瓶、女三瓶、孫三瓶などのどれか  
一つに登ったりするくらいであった。女三瓶の隣の  
大平山にリフトで登るだけのこともあった。

女三瓶で風太郎と島田は弁当を開いた。島田は自分で作ってきたと見える弁当であつた。風太郎は途中のコンビニで買った握り飯弁当だ。

島田は三次市内に住んでいると言つた。風太郎が湯来町だと言つると、三次よりだいぶ田舎ですネと言つた。弁当の時間にはいろいろなことを話した。島田は、三十二歳独身だとも言つた。三次市内で教師をしているのだそうだ。はきはきと話す女性だと思

った。

風太郎は、同い年だが細々と小説を書いているので、金のかからないことしか出来ないと言った。しかし、自己紹介をするときに風太郎は、なかなか小説を書いていると言えないのだが、彼女の前では素直に言えるのだった。島田と言う女性には人を率直にさせる力があるようだ。知的で美しい顔立ちだが、相当日焼けしていて、精悍な感じさえするのだった。

弁当がすむと、さっさと片付けてリュックを背負った。風太郎もそれに習った。

「じゃ、行きましようか。次は孫三瓶ね」

と彼女は言つて歩き始めた。歩き始めると直ぐに先ほどのペースである。ときどき険しいところでは、後ろに行く風太郎を気遣うように振り返るのだった。今度もほとんど話をしない。途中一度小休止したただけで、一時間少々に孫三瓶の頂上に着いた。孫三瓶

への登りは、風太郎には厳しかったが、齒を食いしばつてついていった。彼女のペースは衰えない。孫三瓶も頂上の見晴らしはよかつた。

リーダーの提案で、彼女が男三瓶で歩き始めるときに言っていたように、この日は子三瓶はやめて、少し戻つて室内（むろのうち）の池の火口跡まで下りてから子三瓶と男三瓶との鞍部を越えて西の原に下りるコースを行くことになった。風太郎は火口跡に

は昔来たことがあつた。僅か数時間の縦走で、時代を異にして出来た四つのトロイデ火山を登り降りし、それら四つの山に囲まれた旧火口まで見る事が出来る。三瓶は、他にはない魅力的な山なのでとても好き。山だと風太郎が言うのと、島田もまったく同感だと言ひ、体力が続く限りここには通ひ続けたいと言ふのだつた。

無事駐車場に戻つた二人は、駐車場の端にある洗



面所で顔を洗い、汗を拭いて車に戻った。無造作に顔を拭く島田はまったく化粧気がないのに、日焼けはしているが美しく健康的な肌をしていた。風太郎は、おかげで思わぬ大きな体験が出来たことを謝した。島田は、またいつかここで出合うことがあったら、一緒に登りましようと言つて、さっさと車で帰つて行つた。実に素っ気無い別れだったが、風太郎には深い印象が残つた。

このように風太郎は、金はないが活発な生活を続けたのだった。三年目には別の出版社からの原稿依頼が入って、執筆にとられる時間は増えたが収入も増えた。

自分の理想の合奏団を立ち上げると言う、念願のテーマについて考える時期が来たと風太郎は感じた。合奏団のイメージは、風太郎の中で出来上がっていた。合奏団の規模は、第一バイオリンは五人、第

二バイオリンが四人、ビオラが三人、チェロ三人、コントラバス一人がいい。風太郎自身は、個人的にはチェロを辞めたくなかつたが、合奏団ではチェロではなく指揮をしたいと考へていた。

まず、これだけの人数をどうやって集めるかが問題である。風太郎は、自分たちが大学時代に立ち上げた弦楽合奏団が、十数年経つた今も立派に活動していることを、第十六回定期演奏会というチラシで

知ったので、まず手始めにそれを聞きに行くことにした。

××大学室内合奏団と称する、後輩たちの楽団は四十人近いメンバーを擁する、弦楽合奏団としては比較的大所帯であつた。指揮者は専門家のようである。この日彼らが演奏したのは、ヘンデルの合奏協奏曲第十二番、エルガーの弦楽セレナード、ブリテンのシンフルシンフォニー、バッハのアリアなどで

あつた。

演奏した彼らは、もちろん知らない顔ばかりだったが、風太郎から見れば自分たちが立ち上げた楽団が連綿と続いてきた姿を見るわけだから、感慨深いものがあつた。

ヘンデルでソロを弾いたバイオリン二人とチェロはなかなかうまかつた。またエルガーやブリテンもそつなくこなしていた。風太郎が立ち上げたころの

無手勝流の楽団とは雲泥の差であり、メンバーにはおそらく経験者も多く含まれているように思われた。しかし、風太郎が目指しているのはこのような、そつのない演奏をする楽団ではない。だが、それよりもまずはメンバー集めである。

会場に来てからも、コンサート中も知っている顔が来ていないか注意深く見回したが、誰にも出会わなかった。

風太郎は、団長に会って見ようと思つて演奏終了後楽屋を訪ねた。通路で行き交う学生たちは、風太郎から見るといかにも青臭く子供っぽく見えた。

団長という学生は、しつかりした顔つきの青年だった。ソロをしていた学生ではなかつたので、風太郎は彼がどこで弾いていたのか思い出せなかつた。

「僕は、第二バイオリンの後ろのほうで弾いています。去年はコンサートマスターをしたのですが、

今年は三年生にバトンタッチです」

「団長さんのほうは、バトンタッチしないのですか？」

「それも、今日の演奏会がすんだので、代わります」  
風太郎は名刺を渡して、自分の計画を簡単に話してから、この楽団を卒業してからも楽器を続けている人を探したいのだが、何か手がかりはないだろうかと聞いてみた。それだったら、卒業生全員の名簿



が作つてあるから送つてくれるということになった。  
名簿は三日後には風太郎の手元に届いた。団長か  
らのメモが入つていて、

「送り先のお名前を見て、私達の室内合奏団の創設者のお一人であることがわかりました。その節は気がつかずに大変失礼しました。これからもお役に立てることがあつたら、遠慮なく言つてください」  
そして末尾に、

「自分は広島市内に就職することが決まっています、当面この住所におります。加藤博」とあり、電話番号も添えられていた。

送られてきた名簿は入学年度順になっており、三人目に吉高義孝、××年度入学、チェロ、住所欄は空欄になっている。

そういえばある時期、卒業生の名簿を作りたいから、連絡先や近況を知らせてほしいと言う案内が転

送されて来ていたような気がする。たしか名簿作成などの費用として幾らかの寄付も集めるといった内容だった。義孝は卒業するとすぐに名古屋に就職したから、在籍当時の湯来の住所にはいなかったし、卒業した楽団に転居を知らせたこともない。そのとき出来た名簿も、住所も何も回答していない風太郎には送られてこなかったのだ。

名簿の風太郎の前後には懐かしい名前が並んでい

た。この人たちは、いまも楽器を続けているのだらうか。風太郎はすぐにでも連絡してみたくなった。

風太郎は名簿を送ってくれた団長に、礼状を書きそれに自分の電話番号を書き、名簿の管理などに役立ててほしいと一万円を同封した。聞いた演奏の感想も書こうとしたが、風太郎としては特に感銘を受けなかったので、書くのをやめた。

それから何日間か、風太郎は名簿を頼りに同期だけではなく、かなりの人たちに電話で、現在の音楽や楽器とのかかわりを聞いたのだった。同期の何人かとは、久しぶりに会おうと言う話がまとまったりもした。また、知らない後輩の中には、仲間の動向に詳しい者もいて、名簿にある何人かの情報をまとめ、教えてもらうことができた。

久しぶりに会おうと言う仲間との会合は、市内の

居酒屋で行われた。当時からそのようなことに熱心だった男が、十人くらいに声をかけたのだった。みんな懐かしさですぐにブランクなどまったくないように打ち解けて会話が弾んだ。男たちも女たちも、当然ながら一人前の大人になっている。学生時代にはおとなしくて後ろの方で居るのかいないのかわからないようにして弾いていた男が、陽に焼けた自信ありげな態度の男になっていた。大手ゼネコンのト

ンネル工事の技術者として活躍しているとのことであつた。集まつた者の中に夫婦もいた。卒業後結婚したそうだが、風太郎は、在学中二人が、仲がよかつたとはまつたく知らなかつた。広島にいた者たちは知っていて、この日集まつた中にも結婚式に出た者もいた。

集まつた十人の内五人は今も楽器を続けていて、いずれも何らかの楽団に属していた。風太郎は自分

の計画を話してみた。一様に面白そうだと言ったが、それに参加して一緒にやりたいと言ったのは、トンネル技師一人だけだった。他の者は、現在入っている楽団の練習と仕事と家庭があつて、とても時間が取れそうにないと言う。トンネル技師の男も、一緒にやりたいとは言ったものの、全国の現場に出張して何日も滞在することが多く、どれくらい練習に出ることが出来るかはわからないと言うことだった。



風太郎は、とりあえずトンネル技師には参加を約束してもらった。

楽器を続けていると言う者がかなりいたにもかかわらず、風太郎が持ちかけた新しい楽団に入ると言ったのは一人だけだったことで、風太郎はこれから、の人集めの大変さを思い知った。しかしこの会では、かなりの情報も得られたので無駄ではなかった。

風太郎が根気よく連絡をとった結果、百五十人を

超える名簿の四分の一くらいについて、何らかの情報  
報が得られた。電話した相手に、楽器を続けている  
人を知らないかと聞きながら、情報を得られた人か  
ら順に電話していったので、楽器を続けていると言  
うかなりの人数のリストが風太郎のもとに出来あが  
った。

ただ、楽器を続けていると言っても、もともとど  
れくらいの腕だったのか、また現在どの程度熱心に

やっているかは電話だけではわからない。本当に熱心が続けている者はたいてい、オーケストラやいくつがあるらしいアマチュアの楽団に席を置いている可能性が高い。

風太郎としては、できれば他の楽団に属していな  
い奏者を集めたかった。練習日にはできるだけそろ  
って出席してほしかったからである。熱心続けて  
いる者は技術的にもある程度上手いと考えられるし、

当然どこかに属して活動している。そうでない者は、あまり熱心に続けていないか、そのような楽団に入つて人と一緒にするのがあまり好きでないかのどちらかである。卒業以来楽器から離れてしまったと言う者も、電話情報ではかなりいた。そういった人たちに音楽への情熱を再燃させてもらつて、風太郎の目指す音楽作りと一緒にやつていくと言う考え方も出来ないことはない。風太郎は、大人の初心者たち

の集まりに演奏の初歩から指導しなおすことを想像して、膨らんでいた大きな夢がややしばみかけた。

だいたいそのような人たちは楽器さえも健全な状態で手元にあるかどうかもわからない。いずれにしても風太郎が考えるだけのメンバーを集めるのは簡単ではなかった。

風太郎は、広島のアマチュア音楽事情を探るために、オーケストラに入ることにした。入団には簡単

なオーデイションがあつた。風太郎はバッハの無伴奏チェロ組曲第一番のプレリュードを暗譜で弾いた。そのときこのオーケストラにはチェロが七人いたが、弾けるチェロとして風太郎は大いに歓迎された。もちろん登録名は吉高義孝にした。

風太郎はさらに、オーケストラのあるメンバーの紹介で平和弦楽合奏団と言う楽団にも同時に所属した。ちようどチェロを一人求めていたことも幸いし

た。ここは十七人ほどの弦楽合奏団で、アマチュアには珍しく自前のチェンバロも持っていた。風太郎はこの平和弦楽合奏団が、自分が考えているような内容の活動をする楽団なら、ここに属してやっつけてもいいとも思うのだった。

しかし、数回練習に参加したら、風太郎の理想とするような楽団でないことがわかった。非常に優れたメンバーと、意識の低いメンバーが混在している

のだ。また優秀な指揮者がいるにもかかわらず、メンバーが演奏する音楽はひとつの方向を向いていない。折角の指揮者の優れた音楽も、メンバーの多くに理解されていない。風太郎は非常にもつたいたいと思つた。できればこの指揮者を仲間に取り入れて、それにメンバーの中から見所のある何人かを引き抜くことができたらいいのだと思つたくらいだ。

一方、オーケストラには弦楽器のメンバーは大勢



いたが、かなり初心者やそれに近いものが混ざっているのと、彼らの多くは大編成の管弦楽曲の醍醐味を楽しむためにやっついていて、話を聞いてみても風太郎がやろうとしているような、地味な室内楽的な弦楽合奏などにはそれほど関心を示さなかつた。

それでも風太郎の潜入作戦はまったく無駄だったわけではない。かなりの人数の楽器をやっている者の情報が得られたし、平和弦楽合奏団の中にひとり、

練習日さえかち合わなかつたら参加したいと言う女性  
性がいたのである。それだけでなくその女性は知り  
合いのビオラをやっている友達を一人連れてくると  
言うのだ。何ごともしやってみるものだと言ふ風太郎は思  
つた。

風太郎は集めた情報で、ある程度意に適つたメン  
バーの見通しを立てることができた。その中には、  
大学の室内合奏団の元団長、加藤博も含まれていた。

この時点で風太郎自身は、人集めを目的に所属した楽団をすべて退団した。オーケストラでも弦楽合奏団でも、

「こいつ、一体何しに来たんだ」

と批判的な目を向けられたが、風太郎は意に介さなかつた。

呼びかけたメンバーの初顔合わせは、市内のある

公民館の広い部屋を借りて行なつた。初日には、参加を表明した十六人全員が出席したので風太郎は感激した。そして驚くべき偶然があつたのだ。人集め目的で入つた平和弦楽合奏団からきた女性が連れてきたビオラの友達と言うのは、何と三瓶を一緒に縦走した島田と言う女性だったのだ。彼女も風太郎を見て驚いた。三瓶では音楽の話などまったくしなかつたのだから、お互いに驚くのも無理はない。そう

言えば、風太郎は三瓶で美しい彼女の左の顎の下に少し痣のようなものがあるのに気が付いたことを思い出した。今考えるとバイオリンやビオラをしている人には大抵はある痣である。あの時はまだ合奏団の準備を始めていなかったもので、顎の下の痣即バイオリンを弾く人と言う発想が鈍っていたようだ。

彼女は島田玲と言つて、楽器の経験が相当あると平和弦楽合奏団から来た女性が言つていた。その女

性も風太郎が島田玲と面識があることに驚いた。彼女と島田玲とは、音楽ではなく山登りで繋がっていた。しかし、島田玲の猛烈な登り方にはなかなかついていけない、何人もの仲間と行くときだけ一緒に行っているのだそうだ。

風太郎は、自分の経歴と今回の合奏団設立の目的などを説明したあと、職業は小説家であること、ペンネームで書いているのだが、いずれみんなに読ん

でもらつても恥ずかしくないものが書けたら、ペンネームを教えると自己紹介をした。それからメンバーみんなの自己紹介があつてから、風太郎が長く温めてきた楽団名を披露した。『風のアンサンブル』これが風太郎念願の楽団の名前である。

いよいよ音を出すときが来た。モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」が最初の練習曲で、これは事前にめいめいに楽譜が送つてあつて、

この日に練習することは伝えてある。第一バイオリンと、第二バイオリンのパート分けは、本人たちとの入念な電話での話し合いで風太郎が決めた。コンサートマスターの席には加藤博が座った。メンバーは半分くらいが合奏団の風太郎の後輩に当たる人たちだ。後輩と言っても、その中に前出のトンネル技師ともうひとり風太郎がまだ在籍していたときの女性がいる以外は、最近知ることになった加藤博だけ



が、風太郎が知っている後輩であつた。実は、たかさんの合奏団の卒業生たちに当たつたのだが、卒業後も熱心に楽器を続けている者はほとんどがどこかの楽団に属していたため、それをはずすとこのような結果になつたのである。もちろん風太郎がよく知っている、学年の近いものの中に現在も熱心に続けている者は何人かいたし、彼らは風太郎の話を書いてぜひ一緒にやりたいと言つた者もいたが、風太郎

は所属団体の重複を避けるという自らの方針を貫いたのだった。また、いまやっている楽団を辞めてまで風太郎の楽団に入ると言う者はいなかつたのだ。

残りの半分が、さまざまな情報を手繰って集めたメンバーだ。年齢層は卒業したばかりの加藤以外は、三十から五十の間に分布している。総勢十六人のうち十人が女性である。

風太郎のタクトで颯爽とモーツァルトの音楽が流れ出した、と言いたいところだが実際は違った。まず風太郎が指揮棒で求めたテンポで音楽は始まらなかった。風太郎が求めたテンポを的確に読み取って弾き始めたのはコンサートマスターの加藤だけで、他のほとんどはもつとのろのろとしたテンポで始めたのだ。実際にテンポものろかったが、それ以上に出てきた音のスピード感が、のろのろとしたもので

あつた。そしてそれぞれの取つたテンポはまちまちだつたために、まったく不揃いとなつた。四小節もいかないところで風太郎は演奏を止めた。何しろ初めての音出しだから、こういうこともあるだろうと思つて、風太郎はもう一度同じテンポで始めた。結果は一回目と同じであつた。ふたたび四小節目で止めた。

「もつと速いテンポでお願いします」

風太郎は、笑顔を絶やさないうようにして穏やかに言った。初めてのメンバーの中で弾くのは緊張するものだと言うことをよくわかっているつもりだ。

「もう少しゆっくりしてください」

第一バイオリンの席から一人の女性が言った。そうすると、それに同意するような声があちこちから出た。

風太郎がこの曲を最初の練習曲に選んだのは、こ

れなら誰もが知っていて、弾いたこともあるはずだから、少なくともテンポくらいは風太郎の思うようにできるだろうと思つたからである。そのテンポについても注文がついてしまった。これではもつと速いテンポでやりたい第四楽章はどうなるのだろう。風太郎は早くも心配になつてきた。しかし、実際に音を出す人たちが、もつとゆっくりでないで弾けないと言ふのだから仕方がない。風太郎はかなりテン

ポを落として、初めからやり直した。今度はだいた  
いタクトどおりのテンポでついてきた。しかし細か  
いところではまったたく合っていないなかつた。弾いてい  
るうちに速くなつていく者、逆に遅くなつていく者  
といろいろだ。コンサートマスターの加藤も速くな  
つていく者がいると、それに釣られて速くなる傾向  
がある。響きの点でも、美しいはずの音楽とは無縁  
のような音でみんな弾いている。もちろん音程は不

揃いで、和音は濁りっぱなしである。

弦楽器をやっている、合奏をするというくらいのも者なら、一度は演奏したことがあるはずの「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」だが、風太郎はこの三ヶ月間精力的に集めたメンバーのレベルを知って、やや失望した。しかし、すぐに考え直した。よく弾けるアマチュアには、変に自信があつて他人の指示に従いたがらないものが少くない。それに比べる



とこのメンバーは、そのような変な自信にはまみれていない。うまくやっついていけば、かえってこの方が自分の目指す音楽ができるかも知れないと思いなおした。ただし、難しい曲は選びにくいと言うことはあるが、それはみんなが一緒に徐々に上達していけば、いろいろな曲ができるようになるだろう。

この日風太郎は、「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」の全曲を、メンバーが望むテンポで二度ば

かり通して練習を終えた。

練習の後、風太郎は加藤博を喫茶店に誘った。広島  
島の街には、多少コーヒーの値段が高くてもいいの  
だが、そのかわりゆっくりくつろいで話ができるよ  
うな店が見当たらない。中心部にもあるのはスタン  
ド型のコーヒーショップである。二人はドトールに  
入って、コーヒーとアップルパイを頼んで窓際の背

の高い椅子に腰掛けた。

「どうでした？」

風太郎は、まず加藤博の感想を聞いた。

「そうですね。みんな初めて顔を合わせたわけだから、あんなものじゃないですか」

加藤は当たり前障りない返事をした。

「僕はね、最初に振ったテンポでやってみたかったんだが、あれは無理だと思いませんか？」

「いや、僕はとてもいいテンポだと思いました。あの曲は猫も杓子もやりますが、実はモーツァルトの、彼にしては晩年の作で、すごい名曲だと思うんですね。だから僕も前から、聞くものの胸に飛び込んでいくような生きた音楽になるように演奏したいと思っていたのですが、これまで何回も演奏したのは、どれもそんな風にはできなかつたです。だから僕はさつき風太郎……」

「風太郎でいいよ」

自己紹介ではペンネームは言わなかったつもりだが、何故か加藤は知っている。どこからその情報が流れたのかわからないが、もしかしたら作品も読まれているかも知れない。

「でもどうして知っているの？」

「山科さんって言われる方、がっしりして日に焼けた私たちの大先輩。あの方がこっさり教えてくれま

した。あなたの作品が載っている雑誌も貸してくれました」

「ええっ」

「さつき借りたばかりだから、まだ読んでませんけど」

「まいったな。禄でもないのを読まれちゃったなら、偉そうな顔して指揮なんかしてられないじゃないですか」

「そんなことないですよ。こんな全国的な文芸雑誌に書いておられる人が指揮者の楽団にいるのだから、みんな誇りに感じますよ」

そうやって加藤は山科から借りたと言う雑誌を取り出した。それは比較的最近作品を書き始めた出版社のもので、風太郎は今も愛欲小説を書いているが、この雑誌に書いたのは推理小説である。風太郎は、建設会社に勤めている同期の山科が見つけたのが愛

欲小説の方でなかつたのでホツとした。加藤が取り出した雑誌にはご丁寧に付箋がつけてある。加藤は付箋のところを開いた。『ある三文小説家が見たもの』。見覚えのある表題が出てきた。

「いいよ。後で読んで。まあ、大事な読者さんと言うことだよ。あとで感想聞かせて」

風太郎は少し照れながら、その場をしのいだ。加藤は、雑誌を鞆にしまうと、



「風太郎さんが体を踊らすようにして振り始めた瞬間、おっ、これはいいと思いました。これからの練習次第でみんな出来るようになりますよ。みたところみんなまじめそうな顔してたし」

「そう言ってもらえると、元気が出てきたよ。実は、とろとろとしたテンポで、濁った音に包まれて練習を終えたときには、この人選では無理だったのかなと、少し気落ちしていたんだよ。でも練習の課題は

多岐にわたっていて、前途は厳しそうだね」

「そうやって音楽作りしていったほうが、最初からみんな何となく弾けてしまうのよりいいんじゃないですか。弾けてしまおうと言っても本当の音楽になつたと言うわけではないはずなのに、それ以上にしようとする意欲が出てくるとも限りませんからね。弾く人たちが、『なんだ、アイネ・クライネか』と思つてしまったらだめですからね。だいたいわれわれの

レベルでそんなこと言える筈がないですよね」

加藤博という男は若いのになかなかの考えを持っている。さすがに我が室内合奏団の後輩だと、創設者の一人としての喜びを感じた。風太郎はこの男の協力があれば目指す演奏が実現できるような気がしてきた。

二人は握手をして別れた。新しい友情が生まれた瞬間であつた。

「風のアンサンブル」の練習は当面二週間に一度行われた。団員は次の練習までの二週間にする宿題を出された。それは風太郎と加藤が相談して作ったカリキュラムに沿ったもので、「アイネ・クライネ」のどこどこを弾けるようにしてきなさいと言うようなものではなく、ある音階や分散和音の練習だったり、ロングトーンの練習だったり、有名なシェヴシツク・エチュードのなかから選んだ左手の基礎的練

習だつたりであつた。それを譜面にして毎回団員に配つた。宿題の分量は決して無理のないように気をつけた。いい大人がこのようなやり方に耐えられるかどうか風太郎と加藤は心配だつたが、みんなは思つたより真面目に宿題に取り組んでくるのだつた。

この合奏団に参加するまで、長い間合奏と言うものをしていなかつた者が半分以上いて、練習の回を重ねて慣れてくると、初日のようなことはなく、宿

題の効果もあつてか、アンサンブルの音は目に見えてよくなつてきた。「アイネ・クライネ」のテンポもほとんど風太郎の思い通りに進むようになった。楽器さえやっていれば誰でもいいと言つて集めたのでなく、風太郎が入念に本人と趣旨や内容を話し合つてから入団者を固めただけのことではあつた。

風太郎は加藤と二曲目の練習曲を相談した。実は風太郎の頭の中にはおよそ一年後の十二月ころに第

一回のコンサートを開きたいと言う考えがあり、そこで演奏する曲も決めていた。それは、「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」でコンサートを始めて、同じモーツァルトの初期のデイヴェルテイメント、ブリテンの「シンプル・シンフォニー」、バッハの「ブランデンブルク協奏曲第三番」そしてコレルリの「クリスマス協奏曲」で静かにコンサートを閉じるという構想だ。これだけの曲を、この合奏団で一年で仕

上げることが出来るのか、この時点で風太郎には自信が持てなかった。あくまでもこれらの曲は合奏団の音を聞く前に、風太郎が机上で考えたものである。曲目を変えることも視野に、風太郎は加藤と相談した。

加藤は、風太郎のこれらの考えに異存ないと言った。しかし、名曲ぞろい、「風のアンサンブル」にとつては結構盛りたくさんなので、練習は相当計画



的に進める必要があるとも言った。風太郎は、「アイネ・クライネ」でメンバーがモーツァルトモードになっっているので、次の練習もモーツァルトを続けたらどうかと言ったが、加藤は、むしろまったく違うものをやるのも新鮮味があっつていいと言う。風太郎は加藤の案を取って「シンプル・シンフォニー」を次に練習することにした。

これは成功した。団員たちは「シンプル・シンフ

オニー」の明解な音楽にのびのびとした気持ちで取り組んだ。「アイネ・クライネ」は間違いなくみんながよく知っている曲であるし、音譜を弾くと言う点では難しくて大変と言うところは少ない。しかし、いざ音楽作りに取り組み始めると、実はどのフレーズもどう弾けばいいのかわからなくなってくるのだ。それを風太郎の指導でひとフレーズ毎に弾き方を練習していくことに、みんなややくたびれていたので

ある。

「シンプル・シンフォニー」は譜面面からモーツァルトよりも難しいと思っていた団員たちは、実際に弾いてみるとむしろ逆であることに気が付いた。練習すればするほど難しくなっていくようなモーツァルトに比べて、こちらは練習成果がそのまま音楽に表れるのだった。

こんな調子で、風太郎と加藤の巧みな指導で団員たちの士気も衰えることなく、練習はすすんだ。お互いの顔と名前が一致し始めたころの忘年会もいい雰囲気で盛り上がった。風太郎が嬉しかったのは、多くの団員たちが風太郎の音楽作りには、躍動感や情熱があり、練習が進むに従ってやっている曲が好きになってくると言ったことである。これこそ風太郎が目指す、アマチュアが音楽をする意味なのであ

る。そのことは、多少技術的に未熟なところがあつても、それが問題にならないほど大切なことだと思つてゐるからである。十分に基本的な技術を身につけていない者が音程やタイミングの乱ればかりを気にしてゐては、表現が小さくなる。そもそも技術的なことは、アマチュアはどんなにがんばつたとしても、三流、五流のプロにも及ばない。しかし、躍動感や情熱的な表現に重点を置いて意欲的に作り上げ

た演奏は、きつと聞く者に伝わると言うのが風太郎の考えである。

忘年会ではめでたい話もあつた。加藤博が同じ大学の合奏団から来たチェロを弾く女性と結婚することを発表したのだつた。この話を聞きながら、風太郎は名古屋での合奏団の初めての忘年会で、竹田映子と意気投合したときのことを思い出して胸が熱くなるのだつた。

しかし、「風のアンサンブル」もうまくいくことばかりではなかった。風太郎のやり方に共感できないと言つて辞めていった団員もいた。演奏面でも、モーツァルトのダイヴェルテイメントでは、十六分音符の速い動きがどうしてもできないで、思わぬ時間を取つた。「少々の乱れは……」と言つても許容範囲はある。なかなかそのレベルに達しなかつたのである。多くのアマチュアは、少々練習しても速く弾

くことや、正しい音程を取ることにはなかなか上達しない。ブランデンブルク協奏曲の幾何学模様のような進行感もなかなか出せなかった。要するにロマンティックな感情を吐露できにくい曲は難しかったのである。その点、コレルリの「クリスマス協奏曲」はバロックではあつてもとてもロマンティックな曲である。少なくとも風太郎はそのように捉えた演奏を目指した。これはみんなも弾くのを喜んだが、こ



の曲にはバイオリン二人と、チェロにソロがある。特別に難しいソロではないが、加藤以外の二人にとつては大変だった。何回も居残りの特訓をした。

一年少々前に、知らない者同士が集まって始まった「風のアンサンブル」は、練習を重ねるたびに音楽的にも、人間関係の上でも密度を増して、いよいよ初のコンサートの時期が近づいてきた。

本番が二週間後に迫った。チラシはすでに一月前から出来ていて、市内の区民センターなどに置いてある。また団員達は聞きにきてくれそうな友人にチラシを送ったりしている。練習は最後の追い上げに差し掛かっていた。風太郎はナイーヴになっていた。練習でいらつきを見せることさえあつた。加藤がこつそりと風太郎に苦言を呈した。

「今が一番大事なときだけど、風さんがいらついた

ら駄目ですよ。そうでなくても実際に音を出すみんなは、風さん以上に神経質になつているのですから。風さんはそう言うみんなの気持ちを楽しにさせるようにしなくちゃだめじゃないですか。僕たちみたいなのが、失敗を恐れて縮んだ演奏してしまつたら、折角ここまでやつてきたことが台無しじゃないですか。みんなこれまでして来たことを伸び伸びした気持ちでぶつけたら、それで充分じゃないですか」

加藤の言うとおりであった。風太郎は反省した。敢えて忠告してくれたことをありがたいと思つた。風太郎自身、加藤のおかげで気が楽になつて笑顔を取り戻した。表面的な笑顔や、内心から出ていない優しい言葉ではみんなの緊張はほぐれなかつたが、風太郎自身心からリラックスしたことで、ことさらに笑顔や優しい言葉遣いをしなくても、練習の雰囲気は見違えるように明るく、演奏する楽しさの満ちた

ものになつていった。

「風のアンサンブル」の旗揚げコンサートは県民文化センターのホールで行われる。演奏会が翌日に迫ると、団員にはもちろん緊張の高まりがあつたが、風太郎がみたところでは、むしろ愉しみだという雰囲気の方が大きいように見えるのだつた。

## インテルメッツォ

合奏団に島田玲と言うビオラのうまい団員がいることは既に書いた。三瓶で知り合った日焼けして生き生きした笑顔が印象的な女性である。彼女は子供のころからバイオリンを習っていて、音楽高校まで進んだが、音楽の道には進まず、大学は教育学部に入り、三次市で中学校の理科の教師をしていた。彼

女ほどの楽器の経歴は合奏団では貴重な存在で、もちろんビオラのトップであった。ビオラパートだけでなく、合奏団全体にとっても加藤などとともにみんなを引つ張る立場にあつた。

合奏団には山登りが好きなメンバーが四人いた。二人はもちろん三瓶で出会った島田玲と風太郎だが、他にコントラバスのやや年配の男性と、バイオリンのこれもやや年配の女性だ。もちろんこの女性は島

田玲の山友達で、彼女をこの合奏団に誘ってきてくれた女性である。四人はいつのころからか、誘い合つて山に出かけるようになった。山と言つても県内の日帰りできる山が対象だった。

ある絶好の登山日和に四人はある山に行くことになった。ところが、なぜか風太郎と島田玲以外の二人が来なかつたのである。集合場所の登山口に風太郎が車で行くと、見慣れた島田玲の青い車だけが停



まっている。あとの二人はよく乗り合わせて来るのだが、まだのようだ。風太郎と島田玲は約束の時間が過ぎててもその場で待った。三十分待っても現れない。

「お先にゆつくり登っています。頂上で会いましょう」

とメモを書いて風太郎の車のワイパーに挟んで、風太郎と島田玲は登り始めた。実は以前風太郎が途中

事故渋滞に巻き込まれて約束の集合時間に遅れたことがあり、これと同じメモが残されていたことがあったのだ。そのとき風太郎は一時間近くも遅れたが、急いで三人のあとを追って登り、頂上手前で追いつくと言うことがあった。今回もその例に倣ったのである。二人揃って遅れたのは、おそらく乗り合わせで向かっているからだろう。

風太郎と島田玲は心地良い風に吹かれながら、快

晴の山道を歩いた。展望の良いところでは麓の農地や民家が点在するのを眺めながら休憩した。後ろからやって来るはずの二人が追いつきやすいように、何度も休憩した。もちろん三瓶のときのような猛烈な歩き方を島田玲もしない。

比較的のんびりしたペースだったので、二人はいろいろな話をした。合奏団の練習の進め方についても、島田玲は風太郎に対して結構厳しい見方をして

いることがわかった。風太郎の妥協を許さない厳しい姿勢は悪くないが、みんなをやる気にさせるような雰囲気作りも考えるべきだと言うのだ。あまり上手でないメンバーが厳しすぎると言うのならともかく、よく弾ける島田玲が言うのだから風太郎は考えなければならぬと反省するのだった。

合奏団で音楽の話が出るときには、弦楽合奏曲の話題が多いのだが島田玲は、ピアノ曲が好きで持つ

ているCDもピアノ曲が一番たくさんあると言うのだった。ピアノはドイツのウイルヘルム・ケン  
プが好きで、特にケンプが弾くベートーヴェンのピ  
アノ・ソナタの「田園」や「テンペスト」それに第三  
十二番がたまらなく好きで、繰り返し聞いていると  
言うのだった。風太郎は特にピアノ曲が好きと言う  
わけではないが、ケンプのベートーヴェンは気に入  
っていて、彼女が挙げた三曲は、まさに風太郎も大

好きな曲であつた。二人は意気投合して、ベートーヴェンの音楽の崇高さについて夢中になつて話した。頂上に着いても後の二人は追つてこなかつた。頂上はあまり展望が開けてはいなかつたが、一方だけ樹木がなく遠く中国山地の山並みが見渡せた。風太郎がビニールの敷物を広げて二人は並んで座つた。まだ追いかけて登つてきている可能性があるから弁当はもうちよつと待とうと言ふことにして、二人は

何処までもゆつたりと波打つ山々を眺めていた。努力して歩いて来て頂上で眺める景色は、ベートーヴェンの崇高な音楽に比べられるくらいの素晴らしさであつた。

爽やかな風にそよぐ島田玲の柔らかい髪を見てみると、風太郎は急に胸が高鳴つた。そのとき風太郎の方を向いた彼女に顔を寄せて唇を合わせた。島田玲もそのまま応じて軽く風太郎の肩に腕を回した。

二人はしばらくそうしていたが、どちらからともなく顔を離した。

「ごめんなさい。こうしていると何となくそんな気分になってしまいうわね。お弁当にしましよるか」と、島田玲の方が言った。

「こつちこそごめん。もうこんなことしないから心配しないで」

「そう？」



二人は弁当を開いた。島田玲は自分で作った弁当を持ってきていたが、風太郎は途中のコンビニで買った弁当だった。

「風さんも、弁当作ってくれる人探さない」と

「そうだね。でもなかなかね。島田さんじゃあ僕にはもつたいな過ぎるし」

「そんなことないと思うけど」

結局弁当を食べ終えるころになっても遅れた二人

は登つて来なかつた。仕方ないから下山しようと言  
うことになつて立ち上がったとき、足音と低い話し  
声が聞こえた。二人とも

「やつと来た」

と思つたが、姿を現したのは知らない年配の女性二  
人で風太郎たちの仲間ではなかつた。

「こんにちは」

と声を掛け合つて、風太郎と島田玲は下山にかかっ

た。登つてきた二人が

「やつと着いた」

「きつかったね」

などと話すのが聞こえてきた。さらに

「いいわね、きつと夫婦よ」

と言っているのも聞こえたがその後の会話は距離が離れて聞こえなくなつた。

風太郎と島田玲は登る時と違つて無言で歩いた。

途中で一回ほど、

「ちよつと休もうか」

と言つて小休止を取つた以外登山口の車のところまで無言のままだった。やはり特別の意味がないように振舞つた山頂での行為だったが、お互いの心の中で大きな波紋となつて広がっていたのだらう。車のところに着いた。風太郎の車のワイパーには、登る前と同じに風太郎が書いたメモが付いたままだった。

二人は、それぞれの車のところでリュックを車内に置き、汗を拭き、山靴を普通の靴に履き替えた。

「じゃ、気をつけて帰ろうか」

と風太郎が言ったとき、島田玲はつかつかと風太郎に近づき、軽く肩に手をかけると少し背伸びをするようにして軽く風太郎と唇を合わせると、直ぐに向きを変えて自分の車に小走りに戻って運転席に乗り込んだ。風太郎が立ったままで見送っていると、島

田玲はエンジンをかけ、切り替えして車の向きを変え、とチラツと風太郎に会釈して走り去った。

風太郎が女性に触れたのは、四年前和田山のホテル以来初めてだった。風太郎は島田玲のことを魅力的な女性だとは思っていたが、付き合うことを考えたことはなかった。竹田映子のことがあるためと言うわけでもなかった。風太郎の中で竹田映子は忘れなければならぬひとだった。だからむしろ新しい

対象ができた方がいいと考えることもあったのだが、そのような相手は現れなかったのである。そして今日、登山仲間が来ないと言う偶然によって、意外なハプニングが起きたのだった。風太郎の中で島田玲の存在が俄然大きくなつたのは言うまでも無い。

なお、二人の仲間が山に来なかつたのは、やはり二人乗りあわせて登山口に向かつていたのだが、途中乗用車と接触事故を起こしてしまい、幸いに双方

とも怪我などはなかったのだが、事故処理に手間取り、その日の登山は中止せざるを得なかったのだ。次の練習日に、接触事故でドアから後ろの方まで長い傷跡が付いたまままで乗ってきた男性の車を、風太郎は見せてもらった。

その後の練習で島田玲は何事もなかったように、それまで通りに振舞っていた。むしろ風太郎の方が意識していたのだ。しかしそれも月日とともに



薄れていった。

あるとき風太郎は島田玲に、音楽会に誘われた。ピアノの独奏会で、ドイツのピアノニストだった。プログラムに「テンペスト」が含まれていた。風太郎はあの登山の日を思い出した。

若手には似合わない地味な演奏スタイルで、どこかケンプを思わせるところがあった。「テンペスト」も良かったが、他に弾かれたブラームスやシューマ

ンも良かった。演奏会のあと二人は食事をした。風太郎は島田玲から意外な報告をされた。

「結婚して東京に行くことになったの。お世話になったけど『風のアンサンブル』も辞めることになるわ。いい合奏団だったから残念だけど。実家は広島だからまた聞かせてもらおうことあるかも知れないわね」

「いつ？」

「今週の金曜日」

「急だね」

「ええ」

この日も別れ際に、島田玲はテーブルを挟んだままで上半身を乗り出して、風太郎と唇を軽く合わせた。風太郎は、この人は欧米人のような習慣を持っているのだろうかとも思ったが、島田玲の目を見ると決してそのような軽い挨拶ではなく、風太郎に寄

せる思いがこもっていると思えるのだった。そうだとしたら、風太郎も独身である。もつとアプローチしても良さそうなものだ。と風太郎は思った。山頂での最初の接吻は風太郎からだったのだ。しかし何か事情があつたのだらう。この日、結婚相手がどのような人かとか、どうして急に結婚することになったのかと言つたことを島田玲は話さなかつたし、風太郎も聞かなかつた。

島田玲は「風のアンサンブル」で一度も本番を迎えることなく、風のように合奏団を去っていった。島田玲がいなくなつたことは、風太郎にとつてだけでなく、合奏団にとつても痛手だつた。彼女ほどの弾き手はめつたにいない。ビオラパートがやや弱体化したまま「風のアンサンブル」は第一回の発表会に向けて練習を続けた。

## 再会

そのころ名古屋の竹田家では、映子が旅に出る準備をしていた。母親がそばで心配そうにしている。

「義孝さんには、お前たちが行くことと言つてあるの？」

「いいえ、何も」

「だいたい、本当に奥さん貰つていないのかい？」

「ちやんと情報があるんだから大丈夫よ」

「それにお前たちを受け入れてくれるかどうかもわからないのでしょ？」

「私には、わかるの」

このところ竹田家で繰り返されている話である。

父親はいまでは、勝手にしろと諦めたような態度になっている。しかし母親としては心配なのである。

娘が、別れた男の生ませた子連れて突然行っても、

『はい、そうですね』と言つて受け入れる男がいるとは思えなかつたのである。強気で突つ張つてゐる映子にも、母親の言う心配はよくわかる。でもこの四年間突つ張つてきた意地のようなもので、初心を貫徹しようとしているのだ。

和田山のあと妊娠を知つた映子には戸惑いがあった。義孝の配慮にもかかわらず自ら求めた行為で身



ごもつてしまったのだ。あのとき義孝には、妊娠しない期間だから大丈夫であるかのように言ったが、それは口から出任せだったのだ。むしろ逆に妊娠の可能性もあることはわかっていたのである。しかし映子には密かな考えがあつた。考えと言つても映子自身曖昧でぼんやりした夢物語のようなものであつたが、妊娠すればしたでそれも悪くないと思つていたのである。だが、その妊娠はもちろん義孝が求め

たものではない。

体調の変化に気付いた映子は、一人で産婦人科に行つて妊娠二ヶ月であることを知つた。実際に妊娠してしまつたことを知つた映子はやはり悩んだ。

映子は母親に打ち明けた。もちろん母親は驚いた。そもそも風太郎とそんなことがあつたことも知らなかつたのだ。神戸に演奏に行つたことは知つていたが、風太郎と一緒にだなどとは夢にも思つていなかつ

たのである。

母親はどう考えたらいいいのか自分では判断できず父親に相談した。父親の反応は、やさしく映子の話を聞いた母親と違って激怒した。妊娠したことだけでなく和田山までついていってそのような行為に及んだことを、とんでもない不良行為として娘をなじった。結局、家族では映子の将来を考えて、墮すのがいいだろうという結論になりかけた。

しかし映子は遠大な賭けを考えていた。まず義孝は、自分と別れた後よほどのことがないと結婚はしないだろうと考えた。それでこの子供を生んで育てながら義孝と一緒になる機会を待つと言うのだ。それには義孝の動向を知る必要がある。あれ以来義孝とは一度も連絡を取っていない。父に禁じられたこともあるが、自分も諦められなくなると思ったから敢えてそうしたのだった。

この計画を映子は両親の前で宣言した。父親の怒りはさらに激しくなった。そして、子供を手遅れにならないうちに早く墮せと迫った。このとき母親は、父親の剣幕に対して果敢にも映子を応援すると言いつ切ったのだった。自分も映子の賭けに乗ると言うのだ。父親は、勝手にしろと、この件には口を出さなくなつた。

しかし十か月経って、まるまるとした女の子が生

まれて来ると、その父も実際に娘が生んだ子を、目を細めて可愛がるのだった。

しかし、映子が親に相談なく義子と名づけたとき、父親はまた怒った。これには母親も、いまどきもう少しかわいらしい名前でも良かったのじゃないかと、あまり喜ばなかった。しかし映子にとっては自分の計画をなんとしても成し遂げるために、この名前でなければならなかった。それに何も知らない義孝が、

想像通りに相変わらず自分を忘れられないでいることを疑わない強い気持ちを持ち続けるために必要だったのだ。

映子は、義孝がいるところが広島県の田舎と言うこと以外何も知らない。連絡先も交わしていなかつたのである。手がかりと言えれば義孝が広島県の大学時代に合奏団を作ったことを、話を聞いて知っているく

らいである。

映子は大学に電話して、その合奏団が今もあるか  
問い合わせた。合奏団は現存していて、団長と言う  
学生と連絡を取ることができた。しかしそれは加藤  
博の前任の団長で、義孝のことは何も知らなかった。  
映子は団長に、即答でなくてもいいから何らかの手  
がかりを調べてくれるように頼んだ。そして後日ま  
た電話することにした。一週間後に映子が電話する



と、その団長は卒業生の名簿を調べてくれていて、確かに吉高義孝という先輩がいたことがわかったが、住所も連絡先もわからないと言った。それだけで手掛かりにはならない。一週間経って、たったそれだけしかわからなかったのかと映子は少しがっかりした。広島には訊ねるべきところは他に思い当たらない。

しかし、大きな手がかりを忘れていた。映子は借

りたままになつていた『不倫の果て』が掲載されて  
いる雑誌社に問い合わせた。そこではかつての受賞  
者の名前はすぐにわかったが、いまその人物がどう  
しているのかは把握していなかつた。しかししばらく  
くしてから、その雑誌社の人から、同じ吉風太郎の  
ペンネームで××という雑誌に時々書いているよう  
だと言う情報がもたらされ、その雑誌社の連絡先も  
教えてくれた。それで映子は風太郎こと吉高義孝の

現在の住所まで知ることができたのだ。

だが、すぐには連絡を取らなかつた。映子はその雑誌社の風太郎担当の伊藤という編集者に事情を打ち明けて、風太郎には絶対に言わないことを約束してもらつた上で、風太郎の近況を聞きだすことに成功した。この人の善さそうな伊藤は映子と計画を共有してくれたのだつた。

伊藤は、風太郎が独身であること、小説を書き続

けていること、しかも自分のところ以外の出版社にも書いていること、「風のアンサンブル」という弦楽合奏団を立ち上げたことなどを随時映子に知らせてきてくれた。

映子は、風太郎の前に娘を連れて姿を現す日を、「風のアンサンブル」の第一回演奏会の日と決めた。このとき映子には、なぜか風太郎が自分と義子を受け入れてくれることに自信があつた。それは、いま

も映子の体の奥底に残っている、和田山で体をあわせたときの感触から来るものであつた。

十月になつて、伊藤から映子に連絡があつた。「風のアンサンブル」の第一回のコンサートは十二月十三日の日曜日で、すでにチラシが出ていると言ふことであつた。伊藤は、近いうちに広島に行く予定があるから、そのときにチラシを手に入れて映子に送ることを約束してくれた。映子は、義孝が作ったチ

ラシを見られることに胸を躍らせて、一日千秋の思いで伊藤からの郵便を待った。

十月の中旬に、待ちに待ったチラシが届いた。露をたたえた木の葉を中心にした全体的に深い緑の写真を背景に、「風のアンスンブル」第一回コンサートと白抜き文字が大きく、その下に日付、開演時間、開場時間、入場無料とあり、やや右下に演奏する曲名が並んでいる。裏面も使っており、「風のアンスン

ブル」の紹介があつた。その文章は義孝が書いたものであることは映子には直ぐにわかつた。やや理屈っぽさのある文章は、義孝とさんざん語り合つたころのことを映子に思い出させた。小説の文章にはそのような理屈っぽさの影はまったくなく、何故か音楽を語るときに義孝は理屈っぽくなるのだ。映子は自分の知っている義孝とまったく変わっていないと思つた。

『「風のアンサンブル」』は、アマチュアの愛好家が集まった弦楽合奏団です。だから一流のプロの合奏団のように、素晴らしい音楽性と、高度な演奏技術によつて聞く人に最高の音楽をお届けすることは出来ません。こうして趣味として演奏している私たち自身、そのような一流の合奏団の演奏を大いに楽しみたいと思います。機会があれば聞きに出かけます。また彼らのような世界の一流の演奏がたくさん録音され



ていて、私たちはいつでも聞くことができます。

だからと言って、私たちのような素人が今回のプログラムにあるような優れた作品を演奏してはいけないと言うことはありません。その演奏は世界一流の名演奏と比べると似て非なるものと言わざるを得ません。それにもかかわらず、演奏している自分たちには、名曲に直接自分たちの手で触れる喜びがあります。これは空き地での草野球と同じ楽しさで

す。

そして、演奏している自分達には、ちよつと大げさな言い方をすると一流の演奏を聞くときよりも大きく心を揺り動かされる瞬間があるものなのです。厳しい物言いをする人たちは、それを単なる自己満足に過ぎないと軽蔑します。しかし私たちは軽蔑されるようなものは取り組んでも意味がないと言つて、捨て去つたりしません。

演奏にはもう一つどうしても必要なものがあるのです。それは演奏する人の感動です。それは毎日仕事として舞台に立つプロ以上に、私たちのようなアマチュアにより多く期待できるものです。

私たちは、この第一回のコンサートに向けて技術も音楽性も訓練してきましたが、それは幾らやっても、多少ましになつてはいきませんがプロの域に近づくことはありません。しかし私たちは演奏する感動

を常に忘れないことを最も大切にしてきました。それを少しでも聞きにきてくださる皆さんにお伝えできるかどうかが、今後さらに活動が続ける意味があるかどうかの決め手になると考えています。』

小さな文字で、チラシの裏面いっぱい印刷してある。映子は義孝の言葉にいちいち納得しながら読んでいたが、チラシを手にとった人がどれだけこれを真

面目に読むかは疑問だと、映子は思った。

映子はこのチラシを母親に見せた。母親は娘の憧れの人が書いたもの感慨深く眺め、裏面の長文も最後まで読んだ。そして、

「義孝さんて本当に真面目な人だね。母さんは初めからそう思ってたけど」

「でも……」

「あの時は、私も動揺したけど、落ち着いて考える

とやっぱりいい人だと思いますよ。父さんだつて本当はわかつていると思うけど、あの人は柔軟な考え方が出来ない人だから。一旦言い出すとそれを変えらるのに抵抗があるの。それに意地もあるし、面子も気にするのよね。あなたが言う通りの生活が実際に始められたら、お父さんもきつと考え直しますよ」

「ええ、必ずうまくやって見せるからね」

「義子が、義孝さんに馴染むかね。というより『お

父さん』で呼ぶようになるといいんだがね」

義子には、今度お父さんに会いに行くのだと、何  
度も話して聞かせていたが、保育園の友達のお父さんは  
みな一緒にいるのに、自分の父親だけどうして家に  
いないので遠くにいるのか、理解するのは難しかつ  
ただらう。

その夜、映子は伊藤が送ってくれたチラシを父親  
に見せた。父親は黙ってそれを見ていたが、特に義

孝のことも映子の計画についても批判がましいことは言わなかつた。映子は昼間母が言ったように、父も自分の考えを切り替える努力をしている最中なのかも知れないと思つた。

映子と義子が出発する日、両親が新幹線のホームまで見送りに来た。映子は、父は仕事が休みの土曜日ではあつたが駅まで来てくれるとは思つていなか



ったので、笑顔で見送る父の姿に胸がいつぱいになるのだった。母は、計画が上手くいくようにと言うことばかりを繰り返すのだった。義孝が映子と義子を素直に妻と子として受け入れるのが心配だったのだ。

映子に手を引かれた義子は、この旅行がどんな意味のものなのか、おそらくよくは理解していなかったのではないだろうか。

広島駅からホテルまではタクシーで行った。一旦  
チェックインして身軽になってからコンサートに出  
かけることにした。ホテルの映子たちの部屋から平  
和公園と原爆ドームが見下ろせた。広島が初めての  
映子は、テレビなどで見ていたよりも綺麗な街だと  
思った。平和公園の木々はまだ紅葉した葉を残して  
いた。

コンサート会場の県民文化センターまでは、ホテ

ルで聞いて歩いて行くことにした。教えられた道の途中で、映子は初めて原爆ドームに立ち寄り、説明文などを読んだ。

会場の県民文化センターの建物は何だか古びているように見えた。入り口に義孝たちのコンサートのチラシが貼られている。義子もそれを

「あれっ」

と言って指差した。映子は、義孝のコンサートがあ

るのは間違いなくこの場所であることを確認できて、少し安心した。

映子は受付でプログラムを受け取って会場に入った。無料のコンサートである。映子と義子はホールが一番後ろの席で固唾を吞んで開演を待った。客席は半分くらい埋まっていた。ステージには山台などはなくただ平面に十数個の椅子が並べられている。弦楽四重奏でもなく、オーケストラでもないこのサ

イズの舞台設定を、映子自身名古屋の合奏団で経験しているので、なじみの形である。ただし名古屋では、義孝が入団してからはいつも一緒のステージであつた。映子は義孝が退団してからもしばらく在籍していたが、妊娠して会社を辞めたのと同時に、合奏団も辞めたのだつた。

義子は母の膝に手を載せていたが、母が緊張しているのを感じていた。予鈴がなると映子は膝がふる

えだし、喉がからからになった。本鈴と同時に舞台が明るくなり、客席が暗くなった。遠い席だったが、自分の顔が舞台の照明で明るく照らされて、義孝に気づかれるかも知れないと思った。

団員が全員下手から出て舞台に揃った。指揮者の義孝も同時に出てきて、全員立ったままで客席に向かって一礼してから席に着いた。それからチューニングがあつた。義孝の姿を確認した瞬間、映子は拍

手をしながら大粒の涙をポロポロ流した。義子はみんなに釣られて拍手していたので母の涙に気づかなかつたが、小さな嗚咽が聞こえて母の顔を見た。涙がとめどなく流れている母を見て、義子は何も言わなかつたが、心配そうに母親の膝に手を置いた。義子はまだ小さかつたが、今回の広島行きが何か大きなことの始まりであることは漠然とわかっていたのだ。

今回のコンサートでは、ポスターは作らずチラシを市内のいくつかの場所に置かせてもらっただけであった。その割には良く入ったと風太郎は思った。

プログラムにしたがってコンサートは進んだ。どの曲にも多少の傷はあったが、風太郎が目指す表現の点では、ある程度できたと手ごたえも感じたのだった。

演奏が進むうちに、映子の気持ちは落ち着いてき



た。演奏されるすべての音が映子の心に染込んできた。おそらく今の状況だったら、どんな演奏であっても映子の心を打つたに違いないが、それを差し引いても十分に人々の心を打つだけの演奏であつたと映子は思った。

「クリスマス協奏曲が」消えるように終わった後、アンコールを求めると拍手が続いたが、アンコールはせずに、風太郎が聴衆に向かつて一言来場の

礼を言い、全員でお辞儀をして会を閉じた。すつきりとした爽やかなエンディングであつた。

終演の挨拶で、義孝は会場をゆっくりと見回しながら話した。そのとき映子のいる辺りも見つたようであつたが、映子に気付いた様子はなかつた。映子たちはしばらく座っていたが、客がほとんど出て行つたのを見計らつて、楽屋に向かつた。

風太郎と何人かの団員は、来場者に礼を言い、来場者の祝いの言葉を受けるためにロビーに出ていた。大学の合奏団時代の仲間が何人も来ていた。合奏団出身者たちはそれぞれ同期の仲間たちにチラシを送ったりしていたのだ。

風太郎が楽屋に戻って着替え始めたとき、

「風さんお客さん」

楽屋の入り口から団員の一人が大声で言った。風太

郎がネクタイをほどこきながら廊下に出すと、そこにこの四年間忘れもしなかつた竹田映子が、小さな女の子の手を引いて笑顔で立っていた。驚いた。とつさに何を言っているのか思いつかず、

「聞きに来てくれたの？」

と、まるで近くに住んでいる友達が聞きに来ていたような言葉だ。しかし映子はかまわず、

「素晴らしかったわ。こんな名古屋のときもなか

った」

映子と風太郎が出会った名古屋の合奏団でのことを言っているのだ。

二人が話しているそばを、女性の団員が通り過ぎていったが、楽屋に入るなり、

「風さんて、結婚していたの？」

「違うでしょ」

「でもあの子、風さんに瓜二つじゃなかった？」

こんな会話が交わされた。すると別の二人が廊下に出て行った。

風太郎と映子のそばを通った後すぐに、

「ほんと、そっくり」

「そうね」

ささやき声が、風太郎たちの耳にも届いたくらいだ。子供を見るためにわざと廊下を歩いたのだ。

「私たち、ただ聞きに來ただけじゃないのよ」

と言つて、ささやき声が去つていった方をちよつと振り向いてから映子は、

「この子、義子つていうの。よく見て」

風太郎はしやがんで、

「義子ちゃんて言うのだね。よく聞きに来てくれたね。お父さんも一緒？」

と話しかけた。義子は首を横に振つた。

「お父さんじゃないの。お母さんと来たの」

「まだわからないの？みなさんすぐに気がついてら  
っしやるみたいなのに」

映子は声を潜めて言った。

「和田山で授かったの」

風太郎は驚いた。仰天したと言ったほうがいい。風太郎はあらためて義子をまじまじと見た。

映子たちがこの日は広島のホテルを取っていることを聞いて、翌日ゆっくり会うことになった。風太



郎は映子と義子を会場の玄関まで送って

「じゃ、明日。九時か十時にはホテルに行く」と言つて別れた。

楽屋に戻ると、

「風さん、突然隠し子を連れてこられて慌てましたね」

「あんなきれいな奥さんとかわいい娘さんをどこに隠してたの」

などと言つてからかわれた。

風太郎はこの日の打ち上げに出ないわけに行かなかつた。第一回のコンサートを終えて、その反省もあるし、今後のことも話し合う必要がある。映子の出現で、映子のほうに気をとられて合奏団のことが上の空になりそうだが、あくまでもそれは風太郎個人の事情で、みんなには関係ない。急用ができたと言つて欠席することも考えたが、やはりちゃんと出

席することにした。

打ち上げは演奏会場から遠くない居酒屋で行なわれた。コンサートの後、反省の話になる前に、楽屋を訪ねてきた女性と女の子は何者かということ、風太郎は明らかにしなければならなかった。妻と子供であると言ふのもちよつとおかしい。許婚と言ふのも少し違ふ。結局、結婚する約束をした人だが、事情があつて結婚できなかつたのだが、このたび結婚でき

ることになりそうなので、初めてのコンサートを聞きにきてくれたのだと多少脚色しながら説明した。

実際には、まだ映子とは結婚云々を話していないが、「和田山で授かった」

と言った映子の言葉で、風太郎は彼女があの子を連れて広島に来た理由を察していた。

そこまで説明したので、みんなは納得して反省会が始まる雰囲気になった。ところが、隅の方で、

「それにしても似ていたわね」

と話す声がして、今度は義子の話題が始まってしまった。自分ではどれほど似ているのかよくわからなかったが、みんなが瓜二つと言うところを見ると相当似ているのだらう。ひとしきりその話題が盛り上がったあと、まだざわつきはあったが、反省会がようやく始まった。

風太郎があらためてみんなの一年にわたるがんば

りをねぎらい、今日の演奏が弾く者の感動を充分に出していたと思うと感想を述べた。そして自分としては、是非この調子で次回を目指して続けたいと結んだ。この結びの言葉は拍手を持って受け入れられた。指揮をした風太郎にそれなりの手応えがあつたのだが、一人ひとりの奏者にとつてもそれぞれ達成感があつたようだ。

やりたい曲がいろいろ出されたり、合宿をしたら

いいとか、リクレーションも取り入れようなどと、賑やかな打ち上げであつた。

二次会に行くと言う何人かのグループもあつたが、それ以外は一次会だけで帰ることになつた。風太郎は一次会だけの組だつた。当然風太郎は強く二次会に誘われたが、明日あの女性と会つて大事な話をするからと言って、解放してもらつた。

言うまでもなく映子の突然の来訪は、風太郎にと

つては大事件であつたから仕方がない。この打ち上げは、第二回のコンサートに向けての大切な出発点の意味もあつたから、風太郎が早々に切り上げて帰つてしまふのは問題もあつたが、あの来訪者を見たみんなも理解してくれるだろうと、あとは加藤に任せただつた。

風太郎は、ホテルに映子と義子がいることを考え



ると、母子二人を残して湯来に帰ることに無責任さを感じたが、湯来に連れて行つても夜具も無い。風太郎は、その思いを振り切つて、とりあえず自宅に帰つた。彼女たちはホテルで暖かく眠つた方がいいだろうと、自分を納得させた。

風太郎が湯来の家に着いたときすでに午後十一時を過ぎていた。明日がどういふ日になるのか風太郎は想像できなかつた。おそらく結婚しようと言うこ

とになるだろうことはわかっていたが、どのような形で話がまとまっていくなのだらう。映子は何らかの条件を考えているのだらうか。疲れていた風太郎は、いずれにしても悪い話になることはないと思い、今夜はしっかりと休むことにした。すべては明日。明日はなるようになると考えて、床についた。思ったよりもぐっすり眠ることが出来て、朝は爽やかに目覚めた。簡単な朝食をすませると、風太郎は映子

たちのいるホテルに行くために八時過ぎに家を出た。

映子は、想像していたよりもあつさりど風太郎に、ホテルに帰されてしまったと言う思いで不満を感じていた。もつともつと熱い再会を想像していたのだ。コンサートの打ち上げがあることもわかるが、ただの知り合いの訪問ではない。特にホテルまで歩いて帰る途中のうどん屋で、義子と二人だけの夕食は侘

しささえ感じたのだった。

いずれにしても明日朝九時にはホテルに来てくれる約束だ。朝名古屋を発ってから義子も疲れているだろう。映子は、今日はゆっくり休んで、すべては明日だと考え直して、ホテルに帰った。義子は風呂にも入らずにベッドに転がると直ぐに眠ってしまった。

しかし映子は眠れなかった。楽屋で義孝に会った

とき、義孝は義子に向かつてたしか

「お父さんと来たの」

と聞いていた。義孝は、自分が他の誰かと結婚して、その子を持ってわざわざ広島まで義孝のコンサートを聞きに来たとでも思ったのだろうか。そうだとしたら自分がこの何年か抱き続けてきた、紛れもなく義孝との子である義子をつれて彼の元に飛び込むと  
言う考えは、自分だけの思い込みで、義孝はそうい

う風には考えていなかったのか。もちろん考えていなかっただろうが、今日出会った瞬間に、自分と同じ思いを持って欲しかった。映子は、明日になったら疑問はすべて氷解して、必ず自分の計画通りになるはずだと信じることにした。九時には義孝はここに来てくれるのだ。そう思って映子は眠ろうとしたが、情報をもたらしにくれていた編集者の伊藤は、義孝が独身であるとは言っていたが、付き合ってい

る女性がいるかいないかについては何の情報もくれないことに思い至って、また眠れなくなつてしまつた。楽屋で楽団員たちに義子が義孝にそっくりだと囁かれたときには、勝利を確信していた映子だが、まだいろいろな可能性があると思ひ始めるのだつた。映子は母親が盛んに心配していたことが、現実になるかも知れないと言う不安も頭をもたげるのだつた。母親は、映子が突然子連れで目の前に現れ

ても、

「はいそうですか」

と言つて、直ぐ受け入れるとは思えないとも言つていた。母のその考えが当たつているのかも知れない。そう言えば、演奏会のあと、どうして一緒に食事をしながら話し合おうとしなかつたのだらう。いつでも会える団員のみんなとの打ち上げよりも、遥かに大切な出来事ではないのか。映子は少し腹立たしい



気持ちにもなってきた。もしかしたら義孝には結婚しようと思っっている女性がいて、直ぐにそのことを自分に言えないので、時間を置くことにしたのかも知れない。きつとそうだ。

結局映子は一睡も出来ず、未明にうつらうつらしただけで朝になつてしまった。そんな映子に比べて義子は、ホテルに帰るとすぐに眠つてしまい、朝までぐっすり寝ていたので、朝から元気そのものだった。

た。頭の冴えない映子と、元気いっぱいの義子はバ  
イキングの朝食のためにレストランに下りて行った。  
食欲も映子と義子は対照的だった。

部屋に戻ると、義子にテレビをつけてやって、映  
子はベッドに横になったが、テレビで言っているこ  
とをいちいち聞いてくる義子に、寝せてもらえない。  
義子は一夜明けて、神妙に母親に寄り添っていた昨  
日が嘘のようにうるさい。

そうこうしているうちにロビーからの電話が鳴った。風太郎が来たのだ。再び何かが始まることを察した義子は、急に緊張した面持ちになった。映子は、義子が口の周りに朝食のジャムがついているのを洗わせ、自分も顔を洗った。映子は普段からほとんど化粧をしない。化粧無しでも充分に綺麗であることに自信があつた。というよりも義孝が、化粧気のない映子が最高に美しいと、かつて言い続けた結果、

映子は自分でもそう思うようになったのであつた。

二人は手を繋いで部屋を出た。エレベーターで一階に降りると、ロビーに義孝がいた。二人を認めると義孝は立ち上がって迎えた。

「おはよう、義子ちゃんもおはよう。昨日はよく眠れた？」

「おはようございます。お疲れのところをすみませ  
ん」

映子は何とも他人行儀な挨拶をした。

「昨日は、一緒に食事したりすべきところを、直ぐにホテルに帰してしまつてごめん。何かちゃんとしたもの食べた？」

「おうどん食べた」

義子が答えた。

「やっぱりそうか。広島のこと何にも知らないからね。本当にごめん」

「大丈夫よ、讃岐何とかってうどん、美味しかったし」

「で、もちろんコンサートを聞くためだけに来てくれたんじゃないんだろ？」

「ええ、そうなんだけど。義孝さんはどう思われませんでした？」

「どうって、早くそつちの答えを聞きたいんだけど」  
久しぶりのためか、何となく話がスムーズに進ま

ない。そばには風太郎とそつくりと言う義子がちよこんと座っている。昨夜映子から、和田山で授かったと突然言われた子だ。

映子は昨夜団員たちが行き交う楽屋前の廊下では平静を装っていたが、いまは口ごもりながら話しくそうにしている。それを見た義子が心配そうに母親に寄り添った。年端の行かない子供でも、大人たちの雰囲気には敏感なものだ。そして、目の前の男

が母親を緊張させていると感じたのか、義子は風太郎の顔をじつと睨んだ。

映子はゆっくりと話し出した。

「昨日ここに来ることは、四年前に決めたようなものなの。妊娠がわかったとき親たちは墮ろせと言ったけど、そのときわたし決心したの。この子を育てながらあなたと再会するときを待つって」

「僕と何の連絡もなしに？」



「あんな別れかたした後、義孝さんがすぐに誰かと結婚したりすること絶対にないってわかっていたから」

映子は、この見通しが間違っていないなかつたことを、早く確認したかつた。

「その後いろいろ調べて、やっと伊藤さんて言う方と連絡がついてから、あなたのことわかるようになったの」

「編集者の伊藤さん？しよっちゅう連絡取り合っているのに彼は何も言わなかったけど」

「伊藤さん、私の計画の協力者になつてくれたのよ」「計画？」

「この演奏会の日に来るって言うこと。義子も連れてきて、あなたにあらためて結婚を申し込むって言う計画」

義孝は、映子が自分についてくると言わなかった

とき、公務員の娘は、口では元気そうなことを言っているけれども、結局こじんまりした生き方しかできないと思つたことを、思い出した。やはり映子はそんな女ではなかつたのだ。そう言えば和田山までついで来た行動にしても、ずいぶん思い切つたものだったではないか。

「和田山で、既成事実を作つて親を説得しようと思つたの？」

「いや、和田山ではただ夢中で、あなたとの別れに耐えようとして行動していたわ。考えが固まったのは、父にひどく叱られて、墮ろせと言われてからなの。私も妊娠は予想していなかったものでシヨツクだったけど、あなたの子なのだから一人でも育てようと思ひ始めたの。そのうち、まだあなたの所に行くこともできるのだと言うことに気が付いたの」

映子は話しながら、目に今にも零れ落ちそうに涙を

溜めている。

風太郎は自分がこの遠い地で、一人で小説を書いたり合奏団を始めたりしているときに、映子が自分に対する熱い思いを胸に、自分との再会を願って必死で生きていたことを思うと胸がいつぱいになるのだった。

「つまりプロポーズしているんだね。そのプロポーズ、もちろん喜んで受けるよ」

風太郎も目にいっぱい涙を溜めながら言った。この四年間の映子の心情を思うと感動して胸がいっぱいになったのだ。

映子は昨夜からの煩悶がいとも簡単に解けて拍子抜けでさえあつた。落ち着きを取り戻した映子は、気になつていたことを聞いた。

「義孝さん、四年間も好きな人できなかつたの？」  
「ぜんぜん」

「本当に？義孝さん持てるのに」

「本当だよ」

「忘れられなかつたって言うこと？」

「映ちゃんのこと？」

「うん」

義孝は島田玲のことが浮かんだ。しかし彼女を結婚相手として考えたことはないし、恋人でもない、頭の中で否定した。

「それもそうだけど、いつも原稿の締め切りに追われていたし、庭の草はどんどん伸びるし、合奏団のこともあるし。結構忙しかったんだよ」

「ふーん、そうなの」

「信用してないみたいだね」

「まあ、いいか。プロポーズ受けてくれたんだから」  
映子は名古屋で将来を信じあっていたころの映子に戻っていた。



風太郎と映子の長話に、いつの間にか義子はロビ  
ーの中を勝手に歩き回り、フロントのあたりで制服  
のお姉さんに相手をしてもらっている。

「今日は、一旦名古屋に帰るけど、あらためてこれ  
からのことを相談しましょう」

「そう言えば、お父さん認めてくれたんだね？」

「ええ、私の頑固さにあきれて、諦めてしまったみ  
たい。今回も名古屋駅まで母と一緒に見送りに来て

くれたのよ」

この一言に、また義孝の目に涙が溜まった。

「それはよかった。式は、まあ式かなんかはわからんけど、名古屋でしようか」

「それも含めて、よく考えて打ち合わせましょう。でも、来て良かった。作戦大成功ね」

「今日の新幹線に乗ればいいんだったら、我が家を見てから行かない？車で送るから」

映子と義子は、湯来の家を見て、向かいの家に挨拶してから、広島駅まで義孝に送られていった。広島駅でお好み焼きを食べ、両親への土産を買って新幹線に乗った。映子は、冬の柔らかい陽射しがさんさんと降り注ぐ山陽路をひた走る車窓を眺めながら、これまでの四年間の緊張と、いま願いが叶えられた解放感が次々と浮かんできて、退屈する間もなく夕方の色を濃くした名古屋駅に降り立った。映子の

報告を両親がどのような喜んでくれるか想像しながら、すでにラッシュユが近づいて込み始めている地下鉄に乗り換えた。

## エピローグ

名古屋で、映子の両親と義孝の叔父夫婦だけを交

えた食事会が、二人の結婚式だった。あとは役所への婚姻届と義子の養子縁組の手続きだけで、映子は直ぐに引越しの準備に取り掛かった。義孝の家は広かったが、何もない殺風景な一人住まいの暮らしぶりだったことを考えて、映子は生活を快適にするために必要なものをいろいろ考えて持って行くことにした。映子と義子は凍りつくような寒い一月の下旬に広島風の風太郎のところで生活を始めた。

義子は田舎の小学校に上がり、映子は「風のアンサンブル」に入団して、練習には親子三人で出かけた。年一回の演奏会には、名古屋から映子の両親も聞きに来て、ついでに空気のきれいな田舎を何日か楽しんでいくようになった。

それから三十年、「風のアンサンブル」は、小さな問題はそれなりにあつたが、それらを解決しながら

順調に活動を続けた。メンバーに多少の入れ替わりはあつたが、いまも結成当時のメンバーが多く残っている。当然ながらメンバーの平均年齢は、結成当時よりも大幅に上がった。それでもマンネリにもならず、常に新鮮な気持ちで合奏を楽しんでいた。それにはいまも中心にかかっている加藤博と風太郎の二組の夫婦の努力があるからだったし、あとから入ってきた若い団員の中にも優秀なメンバーが

いたからである。

作家としての風太郎は、これと言った大ヒットもなかったが、仕事が無くなることもなく、一応作家としてのポジションが続いていた。ただ、ものを書き出したころ目標としていた、音楽について書くと言う夢は実現できていなかった。二度ほど吉田秀和賞を意識して、音楽出版社に原稿を送ったが活字にはならなかった。



義子は、父と同じ広島の大学を卒業し、広島で就職した。まもなく社内結婚して広島市内に住んでいく。子供も二人いて、田舎のじいちゃん、ばあちゃんのところに行きたがって、忙しい義孝と映子を喜ばすと同時に悩ませた。

義孝が父親と同じ肝臓ガンと診断されたのは、そのような順風満帆の最中だった。初めのうちは、最

近ひどく疲れやすくなつたと言つて、同年代の者たちと笑つていたが、義孝はまだ六十半ばだった。仲間と年取つた自分たちのことを笑っているくらいのはときは指揮も続けていたが、二時間あまり練習したあとの休憩のときに異常なくらい疲れを感じるようになり、後半の練習ではすっかり集中力がなくなるのだった。それらを適当に誤魔化して練習を続けるのにも限度があつた。義孝は指揮をやめ退団した。

映子も夫を看る必要があると言つて退団しようとしたが、団員たちに説得されて楽団に残つた。みなは映子が、夫と共に田舎に引つ込んでしまふのは、映子の将来のためにならないと心配したからだつた。義孝は、ガンの治療を拒否した。いわゆるガン放置療法に従つたのである。病状が進むにしたがつて、執筆の作業はいちどに短時間しか続かなくなつていった。執筆の量を減らした。登場人物の名前や、無

数の名詞が、横に置かれたメモ用紙に書かれていて、いちいちそのメモを確かめながら書き進めるのだった。集中力は衰えても、物語の展開についてはこれまで通りイメージが広がるのだった。

義孝は、風太郎として最後になると思いながら、進行するガンに罹った男を主人公にした小説を、失われていく体力と向き合いながら書き上げた。三十枚足らずの短編で、これが本人の予想通り風太郎の

絶筆となつた。

義孝は散歩に行くと言つて出かけて、十分も経たないうちに交通事故に遭う。

「ご主人が国道でトラックにはねられた」

近所の人が駆け込んできて、映子が現場に走つた。救急車が義孝を担架に乗せたところだつた。

義孝は運ばれた病院で死亡が確認された。はねられたときすでに即死状態だつたらしい。緩やかに力

ーブしている国道を渡ろうとして、トラックにはねられたのだ。

トラックの運転手は警察で、かなり前からお互いに見えていたはずなのに、自分のトラックがかなり近づいてから、義孝が急にフラフラと道に出てきた。あわててブレーキをかけたが間に合わなかった。

「まるで自殺みたいなもんで、迷惑を受けたのは自分の方だ」

と言つたそうだ。

義孝がぼんやりして道路を横切ろうとしたための事故として処理された。映子がむしろ運転手に謝る立場であつた。

（風太郎こと吉高義孝の死によつてこの物語はこれで終わるわけだが、読者の皆さんには最後に、是非その後の映子の生き方を聞いてもらいたい）

映子が気丈に勝ち取った幸せな人生は、三十年近くも続いたのだから、運命を呪うこともないかも知れない。誰でも歳を取れば何らかの病などを得てやがて死んでいく。しかし義孝の肝臓ガン発症で暗雲が立ち込め、それに続く事故死まではあまりにも突然訪れた。

映子は、風太郎の最後の作品を読んでみたくなっ



て、風太郎のパソコンを開いてみた。原稿はかなり前からメールで出版社に送っていたから、書いた作品はすべてパソコンの中に整理されているし、出版されたものは本がある。映子が過去の作品を整理して管理する手伝いをしたこともあるので、よくわかっていている。しかし、最後の作品だけはパソコンのどこを探してもなかった。故意にかどうかわからないが、風太郎は作品をパソコンに残さなかったのだ。

映子は伊藤に頼んで送ってもらふことにした。すでにその作品が掲載された雑誌は発売を待つばかりになっていた。『ガンを患つて』と云う表題の小説は、フィクションとしてあつたが、状況描写はほとんど自らの体験に基づいていた。主人公の男は、住んでいるマンションの十階から身を投げて自ら命を絶つことになつていた。映子は、義孝の交通事故は自殺ではなかつたのかとの疑問が頭から離れなくなつた。

悲しみに暮れる映子を懸命に支えたのは、加藤夫妻と合奏団の仲間たちだった。加藤たちの説得で、義孝の死の一月後に映子は

「おかげさまで元気になりました」

と言つて、「風のアンサンブル」に復帰した。映子は夫がやりたかった音楽を引き継ぎたいと言つて、みなの了承を得て指揮者になった。義孝が常に言つていた生き生きとした表現、情熱的な表現を目指すう

ちに、映子は自らが指揮して演奏する音楽によつて  
生気を取り戻していった。

もう一つ映子にとつて力強い味方が現れた。ビオ  
ラの島田玲が「風のアンサンブル」に復帰したのだ。  
島田玲は結婚して東京で暮らしていたが、夫が病死  
したため実家に戻つたのだつた。島田玲自身既に還  
暦を越していたが、山歩きもビオラもずっと続けて  
きたのだつた。彼女は旧姓の島田で三十年ぶりの再

入団となった。島田玲は結婚すると言つて退団して東京に行くとき、実家に戻る事もあるからコンサートを聞きに来ると義孝に言つたが、三十年間その機会はなかつた。だから映子とは初対面だつた。年齢を重ね、夫を亡くしてからも変わらない島田玲の前向きな生き方と、同じように風太郎を亡くしてから、も積極的に生きようとする映子とは意気投合して、生涯の親友となつたのだつた。

島田玲が湯来の映子のところに泊まりに来たことがあつた。映子は島田玲にドラマチックな風太郎との物語をして聞かせた。映子の長い話を聞き終わった島田玲は、

「人生はいろいろな出来事や偶然が重なり合つて出ていくものなのね。私は「風のアンサンブル」の最初の在籍期間は短かつたのだけど、実を言うと風太郎さんが好きだつたの。でも彼、あまり私のほう

を向いてくれなかつたわ。あなたのことがあつたのね」

「それは違ふかも知れないわよ。私は親に反対されて結婚を諦めた女だつたの。だから彼としては、いい人が現れたら私を忘れるためにも、激しい恋がしたかつたかも知れないと思うわ。玲さんみたいに素敵な方がいたのにどうしたのですしょうね」

「でも映子さんは、彼が絶対に自分のことを忘れな

「いって、自信があつたのでしょ」

「それは、本当のことを言うのと、そうあつて欲しい  
と言う願望みたいなものよ。親にも絶対大丈夫って  
言っていたけど、最後の瞬間まで不安がいっぱいだ  
つたわ」

「凄い冒険だったのね」

「そう言うことになるわね」

「私なんか、風太郎さんが好きだったのに、親が勧



める相手のところにあつさり嫁いでしまったのだから、情けないわよね」

「何かそうしなければならぬ理由があつたの？」

「ないわ。強いて言えば、彼も山男で、ヒマラヤやアルプスにも一緒に行こうって言われたので、こころりといっっちゃつたの」

「じゃ、ヒマラヤに行ったの？」

「ええ、ヒマラヤも、アルプスやアンデスやいろいろ

ろ連れてつてくれたわ。彼お金持ちだったの。けどアンデスに行つたとき現地でもらつてきた変な病気がもとで死んじゃつたのだから、どうしようもないわよね」

島田玲は、そんな世界的な山に行つたことよりも、三瓶や近くの山に風太郎と行つたときのほうがずっと素晴らしかったと言いかけたが、思いとどまつた。映子はその後約十年間「風のアンサンブル」の指

揮者として夫の遺志を貫いてから引退した。その後は娘の嫁ぎ先で静かな余生を送った。

(完)

(＊この物語は、フィクションです)

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュアとしてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同じ時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中心から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりますの

で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))

への投稿の形でも発表していきたいと考えておりますので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。



## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

## 四重奏



親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

# コンサートは開かれた

---

2022年5月31日 初版発行

著者 山中與隆

編集発行 山中伶子

表紙素材元 illustAC

© Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---